

2023年度
日本女子大学
社会連携教育センター
活動報告書



2023年度社会連携教育センター活動報告書 目次

○2023年度の社会連携教育センターの活動を振り返って

社会連携教育センター 所長 家政学部被服学科教授 横井 孝志 …………… 1

○2023年度の社会連携教育委員会を振り返って

社会連携教育委員会 委員長 理学部化学生命科学科教授 今城 尚志 …………… 2

○正課外学修の推進

▼正課外学修・イベントについて …………… 3

▽正課外学修・イベント一覧 …………… 4

▽正課外学修・イベントアンケート …………… 6

▼社会連携活動支援助成について

自主活動推進プロジェクトチーム 文学部史学科教授 藤井 雅子 …………… 20

▽社会連携活動支援助成スケジュールおよび採択テーマ一覧 …………… 21

▽社会連携活動支援 活動報告

東日本大震災の被災地の現状を大学生に伝える

申請No.01 人間社会学部文化学科2年(3名) …………… 22

北海道日高管内の保育施設における運動支援活動

申請No.02 家政学部児童学科3年(7名) …………… 24

ドギーバッグの認知・普及

申請No.05 家政学部家政経済学科3年(10名) …………… 26

鴨川市のお寺で経典整理ワークショップ

申請No.06 文学部史学科3年(5名) …………… 28

唐丹の地域住民に向けたかるたワークショップ

申請No.08 家政学研究科住居学専攻1年(3名) …………… 30

北海道から離れた地域にアイヌ文化をひろめる

申請No.12 文学部史学科3年(6名) …………… 36

▼JWUチームボランティアについて …………… 38

▼学外へのボランティア学生派遣について …………… 39

○地域連携報告

▼心理相談室活動報告

社会連携教育センター分室心理相談室長 人間社会学部心理学科准教授 堀江 桂吾 …… 40

▼文京区妊産婦・乳児救護所と文京避難所大学について

家政学部住居学科教授 平田 京子 …………… 41

※所属・役職については2023年度時点のものとなります。

※2024年度より、家政学部住居学科は建築デザイン学部建築デザイン学科に改組しました。

▼文京区体力・増進事業について	
家政学部児童学科准教授 杉山 哲司 澤田 美砂子	44
▽文京区連携活動報告	45
▼川崎市多摩区3大学連携事業について	
家政学部児童学科教授 請川 滋大 准教授 安藤 朗子	47
▽川崎市多摩区連携活動報告	48
▼板橋区立中央図書館との連携事業「親子読み聞かせ講座」と「図書館サポーター講座」	
家政学部児童学科准教授 今田 由香	50
▼板橋区立中央図書館との連携事業「みんなで歌おう！わらべ歌」「歌って遊ぼう！わらべ歌」	
家政学部児童学科教授 根津 知佳子	51
▼板橋区教育委員会との連携事業「中台延命寺史料調査」	
文学部史学科教授 藤井 雅子	52
▼北海道日高管内7町・日高振興局・日高町村会との包括連携について	54
▽被服学科科目「民族服飾論」平取町連携オンライン授業	
家政学部被服学科教授 森 理恵	55
▽日本女子大学文学部学術交流企画「アイヌ文化とその伝承」について	
文学部史学科教授 藤井 雅子	56
▼北区社会福祉協議会との連携事業「学習支援教室講師派遣/心理ケア訪問相談会」活動報告	
人間社会学部心理学科准教授 堀江 桂吾	57
▼高知県高岡郡梶原町との包括連携について	58
○産官学連携報告	
▼2023年度 AI・データサイエンス、ICTに関する社会連携活動	
理学部数物情報科学科教授 長谷川 治久	59
▼日本総合住生活株式会社との産学連携について	
連携推進プロジェクトチーム 家政学部住居学科教授 定行 まり子	61
▼株式会社読売広告社との産学連携について	
連携推進プロジェクトチーム 国際文化学部国際文化学科教授 中西 裕二	63
▼「株式会社クボタ筑波工場におけるメニュー開発について」	
家政学部食物学科教授 松月 弘恵	64
○JWU子育てサイエンス・ラボ/子育てサイエンス・カフェ	
▼JWU子育てサイエンス・ラボ活動報告	
子育てプロジェクトチーム 人間社会学部心理学科准教授 麦谷 綾子	65
▽子育てサイエンス・カフェ アンケート	66
○SDGs特設サイト	
▼2023年度 SDGs特設サイトについて	85

※所属・役職については2023年度時点のものとなります。

※2024年度より、家政学部住居学科は建築デザイン学部建築デザイン学科に改組しました。

2023年度の社会連携教育センターの活動を振り返って

社会連携教育センター所長 横井孝志
(家政学部被服学科 教授)

社会連携教育センター報告書第4号をお届けします。

2020年4月に社会連携教育センターが発足してから4年が経過しました。この間、様々な方々に当センターの活動をご支援頂いたことに対して、心より御礼申し上げます。

本学の社会連携教育センターは、日本女子大学と地域社会とを繋いで、本学の研究・教育資源を活用した地域社会における課題の解決や、地域社会における実践的現場を活用した社会連携教育の実現を支援する組織です。センター発足4年目となる今年度は、これまでの活動を振り返りつつ、種々の活動をより円滑に実施できるように体制を修正して、活動を進めました。

現在進めている社会連携教育センターの活動には、社会連携活動支援助成事業などの正課外学修活動、学生の自主的な学外ボランティア活動、文京区、川崎市、板橋区、北海道日高管内7町、高知県梶原町との地域連携活動、AI・データサイエンス、ICTに関する社会連携活動、日本総合住生活株式会社、株式会社読売広告社との産学連携活動、本学の研究と地域の子育てとを繋ぐJWU子育てサイエンス・ラボの活動など、様々なものがあります。これらに加えて、SDGs特設サイトを設置し、本学教員の様々なSDGs活動も紹介しています。4年目にはそれぞれの活動がさらに深化し、本格化しました。また、2021年度に正課として「JWU社会連携科目」が開講となり、2年目となる2022年度には「JWU社会連携科目」の中に実習科目として「社会連携・社会貢献活動Ⅰ・Ⅱ」が開講となりましたが、こちらも随時改善を重ねながら運用を継続しています。

今年度も、様々な地域、団体や企業の方々をはじめとする多くの方々のご支援ご協力により、無事に活動を推進し、よい成果を上げることができました。是非この報告書をご一読頂き、皆様方のご意見をお寄せ頂くとともに、今後の皆様方の社会連携の参考にして頂けると大変ありがたく思います。

2023年度の社会連携教育委員会を振り返って

社会連携教育委員会 委員長 今 城 尚 志
(理学部化学生命科学科 教授)

この原稿を執筆している時点で私は社会連携教育委員会委員長を退任し、社会連携教育委員会の外の人間となっている。そういうわけで私が社会連携教育委員会に関わった4年間を振り返るような話になることをお許し願いたい。社会連携教育センターができるので委員になってほしい、と4年前の理学部長（奥村先生）から依頼されて受諾したのがそもそものはじまりであった。私は理学部行事（夏休み自由研究シリーズ・生涯学習センター）として子供凧揚げ教室を開催するなど、凧つくり外部講師・目白台運動公園との関係を持っていたので社会連携というキーワードにヒットしたらしい。理学部といえどどちらかといえば外部機関・企業との共同研究の仲介という役回りだと思うのであるが、凧つくりというのはいささか奇妙なことである。私が趣味で凧揚げをしていたということであるが、凧揚げという行為が子供と大人を結びつける、凧揚げ場所として近隣の公園と大学の関係を築ける、というまさに大学と社会が連携する活動になっていたのである。日本女子大学の凧つくり教室が人気となり、目白台運動公園でも別途凧揚げ教室を開催したことがあった。

凧揚げから始まったことなので、1年目は牧歌的で極めて楽しい委員会であったのであるが、「社会連携・社会貢献活動Ⅰ・Ⅱ」という実習授業を立ち上げなければならないという課題が当時の三石さん（後の社会連携室課長、現在は入試課課長）から言われ、実習先については何も手がかりがないと告げられたときには大変なことをこれからやらないといけならしい、というくらいの認識であった。1年が過ぎ社会連携教育センターが発足し、私が社会連携教育委員会委員長に指名されたときに、いよいよ他人事ではなく本気で取り組まないといけないとわかり、正直大変なことになった。たまたまであるが、私の所属する学科（化学生命科学科）の佐藤香枝教授から学科の卒業生で北区で区議会議員をしている方がいて、ボランティア活動などに関係しているらしい、という話を聞いた。もしかしたら「社会連携・社会貢献活動Ⅰ・Ⅱ」に関係づけられるかもしれないということで、社会連携室との懇談会を設け、北区社会福祉協議会とのパイプをつくることができた。当時はコロナ禍で対面ボランティア活動がほとんどできないような状況だったが、北区では規模を縮小して活動しており、学生ボランティア受け入れの仲介をして頂けることになった。佐藤先生からお話を頂かなかっただろうだろうか？想像したくない未来予想である。

現在は心理学科の麦谷先生が社会連携教育委員会の委員長に就任され、また委員も入れ替わった。社会連携室は最初は三石さんだけだったが、山崎さんと上村さんが加わり、また課長が三石さんから村山さんに交代し、社会連携室の方々には本当にお世話になった。この場を借りて御礼を申し上げる。

「社会連携」は本学が創立以来大事にしてきたものであり、私も社会連携教育委員会に関わることで新しい知見を得ることができ、人間として成長できたと感じている。ボランティア活動は他人のためにやると考えがちであるが、それより大事なことは自分が成長できることだ、とボランティア団体の方が言われたことは私の財産となった。多くの教員が社会連携教育委員会の活動に関わり人間として成長できる機会を得ることを祈念して本稿を終わりたい。

正課外学修の推進

正課外学修・イベントについて

学生の社会貢献活動への意識醸成、理解促進を目指した正課外学修として、「JWUチームキャンパスボランティア」活動の充実、学外講師による学生向け講座の開催、「社会連携活動支援助成」の運用を実施している。

「JWUチームキャンパスボランティア」については、年度初めに「JWUチームキャンパスボランティア活動紹介week」と称し、学内でできるボランティア活動を紹介する講座を3日間にわたり開催し、のべ147名が参加した。

学外講師による学生向け講座は2回開催した。どちらの講座も多くの学生が参加し、グループワークでは活発な意見交換が行われた。

今年度で3回目となる社会福祉学科との共催による地域交流を目的としたクリスマスイベントは、昨年度までの地域の子どもたち対象から、多世代交流の場とするため地域の町会の方々へも対象を拡げて開催した。

「社会連携活動支援助成」は3年目となり、運用を検討、改善を行った。12組の応募があり、6組が採択された。今年度の運用をふまえ、来年度は、より学生が活用しやすい制度となるよう運用ルールの見直しが課題である。

日本女子大学社会連携教育センター & 日本航空株式会社 (JAL) 参加無料

JAL社員と考えるSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
~地域活性化~

■日時
2023年11月16日(木)
13:30~15:30
※途中休憩を含みます。

■対象
全学年
(全学部生・大学院生)

■会場
五二十年館B1階 JWUラーニング・commonsがえで

■参加申込み (定員50名 ※定員になり次第募集の切らせていただきます。)
■申込方法 JASMINE-Naviにログインしてお申し込みください。
■申込締切 10月31日(火)

問い合わせ 日本女子大学 社会連携室 (9月から百年館高層棟2階に引っ越しました。)

日本女子大学社会連携教育センター

おじいさんかきおき SOS

日時
2023年12月9日(土)
13:30~16:00
(13:00~受付開始)

場所
日本女子大学
五二十年館B1
JWUラーニング
commonsがえで

対象
小学生以下のお子様および保護者10組、
近隣の犬10名 ※定員順

正課外学修・イベント一覧

(※すべてのイベントを対面で開催いたしました。)

●2023年4月5日開催【在学生・学内関係者対象】

JWUチーム キャンパスボランティア活動紹介week (1)

文京区の赤ちゃん子どもを守る防災ボランティア

講師：家政学部住居学科 教授 平田京子

参加人数：19名

●2023年4月11日開催【在学生・学内関係者対象】

JWUチーム キャンパスボランティア活動紹介week (2)

ノートテイクボランティア

講師：ダイバーシティ推進室・社会連携室

参加人数：63名

●2023年4月12日開催【在学生・学内関係者対象】

JWUチーム キャンパスボランティア活動紹介week (3)

多摩区の小学生と身近な自然体験をするボランティア

講師：家政学部児童学科 教授 請川滋大・准教授 安藤朗子・社会連携室

参加人数：65名

●2023年6月1日開催【在学生・学内関係者対象】

知っているようで知らないNPOについて－グリーンウッドの方に聞いてみよう－

講師：NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター

参加人数：20名

●2023年6月8日開催【在学生・学内関係者対象】

<ダイバーシティ推進室×社会連携教育センター共同開催>ノートテイク養成講座

講師：人間社会学部教育学科 准教授 榎本聡

参加人数：27名

●2023年7月24日開催【在学生・学内関係者対象】

妊産婦・乳児救護所1dayボランティア事前説明会

講師：家政学部住居学科教授 平田京子

参加人数：8名

●2023年9月20日開催【在学生・学内関係者対象】

妊産婦・乳児救護所1dayボランティア

講師：家政学部住居学科 教授 平田京子

参加人数：11名

●2023年9月28日開催【在学生・学内関係者対象】

<ダイバーシティ推進室×社会連携教育センター共同開催>ノートテイク養成講座

講師：人間社会学部教育学科 准教授 榎本聡

参加人数：4名

●2023年10月12日開催【在学生・学内関係者対象】

<板橋区教育委員会×史学科×社会連携教育センター共同開催>

板橋区中台延命寺 史料調査ボランティア

講師：文学部史学科 教授 藤井雅子・板橋区教育委員会・中台延命寺

参加人数：37名

●2023年10月21日開催

<史学科×社会連携教育センター共同開催>

日本女子大学文学部学術交流企画シンポジウム「アイヌ文化とその伝承」

講師：平取町立二風谷アイヌ文化博物館

株式会社平取町アイヌ文化振興公社

参加人数：約150名

●2023年11月16日開催【在学生・学内関係者対象】

<日本航空株式会社（JAL）×日本女子大学社会連携教育センター共同開催>JAL社員と考えるSDGs

講師：日本航空株式会社 産学連携部

参加人数：32名

●2023年12月9日開催

<社会福祉学科×社会連携教育センター共同開催>サンタさんからのSOS（クリスマスイベント）

講師：人間社会学部社会福祉学科 准教授 黒岩亮子

参加人数：56名（黒岩ゼミ生含む）

●2024年1月10日開催【在学生・学内関係者対象】

<住居学科平田研究室×社会連携教育センター>

日本女子大学妊産婦・乳児救護所で使用する光源の寄付・LIGHT UP EVENT

講師：家政学部住居学科 教授 平田京子

参加人数：12名

正課外学修・イベントアンケート

イベント名：「知っているようで知らないNPOについて」

ーグリーンウッドの方に聞いてみよう！ー

日 時：2023年6月1日（木）13：30～15：00

場 所：対面開催（12108教室）

参加人数：20名

アンケート：17件（回収率：85%）

<Q1> 今回の参加目的についてお知らせ下さい。（複数回答可）

NPOについて知りたい	14
山賊キャンプに参加したい	9
その他	0

その他：ボランティアへの参加の敷居を下げたい。

<Q2> 講座を受講して山賊キャンプに参加してみたいと感じましたか？

はい	16
いいえ	0
わからない	1

<Q3> この講座を受講してあなたのNPOについての見方が変わりましたか？

はい	13
いいえ	4

<Q4> どのように見方が変わりましたか？具体的にお知らせください。（任意）

- ・ NPOは社会の貢献のために活動をしているということを知った。
- ・ 社会的利益を追求する団体であるということを知った。今まではよく分かっておらず、なんとなくあまりお金を必要としない団体なのか？というようなイメージしかなかった。
- ・ 人と繋がりを感じれるということで、とても良い経験になるだろうと思います。
- ・ 社会への働きかけが大きいと知ることができました。
- ・ ここまで子供たちのことを考えて、地域の人たちとの関わりを大切にしながら取り組んでいることを知り見方が変わりました。
- ・ 国際的な問題について取り組んでいる団体だとおもっていたのですが、学校の教育では学べないところを子どもたちが学べるプログラムがあると理解しました。
- ・ NPOの活動が波及して、その土地の為になることがあるんだと驚きました。
- ・ 非営利の活動であることは知っていたが、活動者のそれぞれが子どもに、自発的に考える体験を提供することにやりがいを感じていることを知れた。
- ・ NPOについて何も知らなかったが、この講座を受講し、利益ではなく社会のために活動しているということがわかった。
- ・ NPO法人がどう経営されているのか、という部分が理解してなかったのでそこを知る事ができた

- ・利益もだしているけれど、その利益はどれも社会のためであるということ。
- ・NPO、ぱっとしていて、わからない団体だったものが、具体的に一つの法人を知ることによって社会に貢献しているのか、理解が深まりました。

※原文ママ

<Q5>この講座に対する満足度をお知らせください。

大変満足した	13
満足した	4
満足していない	0

<Q6>問5についてなぜそのように思いましたか？具体的にお知らせください。

- ・興味深かった
- ・新しい発見が多かったため。
- ・団体の雰囲気を知ることができた。
- ・子どもたちの教育に必要なことを新たな視点で見ることができたから。
- ・実際の映像や写真を交えた説明だったので、子供たちの生き生きとした姿や、可能性を感じられたからです
- ・どのような活動を行っているのかよく分かりました。
- ・自分も動きたいと思ったからです。
- ・実際に参加している方の声を聞いて、来て良かったと思ったから。
- ・これまでキャンプなど全く参加したことがなかったので、キャンプでの学びや普段体験できないことが学べることについて知ることができとても面白かったです。
- ・ボランティアについて詳しく知ることが出来て、子どもたちの活発に活動する姿を見て刺激を貰ったからです。
- ・ボランティアの内容だけではなく、存在意義や理念を知ることができたから。
- ・山賊キャンプの内容のVTRで子どもが自発的に行動していることから明るい気持ちになれた。
- ・NPOについて、山賊キャンプについて、泰阜村についてなど多くのことを知ることができた。講演者の緒方さんの説明もわかりやすく、聴いていて楽しかった。
- ・ビデオなどで実際のキャンプの様子がわかりやすかった所。
- ・山賊キャンプのことなど沢山知れた！
- ・グリーンウッドの方が丁寧に話して下さったから。
- ・自分では知らない世界を知ることができたこと。実際に経験したいと思うような、わかりやすく、面白いお話だったこと。NPOについて知るといより、グリーンウッドについて知るといふ主題の方が大きい気がした。

※原文ママ

<Q7>社会連携教育センターでは、今後も様々なイベントを企画していく予定です。どのようなイベントがあるとよいと思いますか？ご自由にご記入ください。(任意)

- ・様々なボランティアの活動を知れたら良いと思います。
- ・卒業生の面白い活動のお話など
- ・泊まりで出来るボランティアを増やして欲しいです。
- ・様々な職業に関するイベント。

- ・このように申し込んだ人同士、普段交流しない学部の人とも話す機会があると嬉しいです。

※原文ママ

イベント名：ノートテイクー養成講座

日 時：2023年6月8日（木）14：00～15：30

場 所：対面開催（JWUラーニング・コモンズかえで）

参加人数：27名

アンケート：27件（回収率：100％）

<Q1>本日のイベントにどのくらい満足していますか？

満足	26
やや満足	1
やや不満	0
不満	0

<Q2>今回のイベントにご意見・ご要望・ご感想がございましたらご自由にお書きください。（任意）

- ・難しかったけど、楽しかったです。
- ・タイピングには自信がありましたが、やってみると緊張で、すごく手が震えました!
- ・やってみると想像していた以上にとても難しかったですが、私もぜひこれから活動してみたいという気持ちになりました。
- ・初めてのノートテイク体験、難しさも感じましたが、連携して行う作業がとても楽しかったです。練習して、ぜひノートテイクに参加させて頂きたいと思いました。
- ・大学生になってからPCを触り始め、まだ2ヶ月ほどしか経ってないのでとても難しかった。
- ・とっても緊張しましたが、新しい世界を知れてすごく勉強になりました。
- ・タイピングが遅くて、少し不安があったけど、想像してたよりも楽しくできたし、完璧に出来なくても良いことが分かったので、ノートテイクーとしての活動に興味を持ちました。今回のイベントに参加して良かったです!
- ・講座を受けるまで、ノートテイクのことを何も知らなかったなので、とても勉強になりました。
- ・ノートテイクの難しさが身をもってわかりました。この少ない時間でももっと上達できそうなコツだったりが見つけられたので良かったです。
- ・先輩からお話を聞くことができ、ノートテイクーのイメージが湧きました。ありがとうございました!
- ・大変でしたが、とても楽しかったです。ただ、パソコンって賢いので、文字入力したときに予測変換出してくれるのですが、それが出てくるせいで、私と連携入力してくださっている方が何をどこまで打っているのかわからなかったなので、どうにかしたいです、。
- ・パソコンを打つことが難しかった。分担するところが難しかった。初めて使ったため、最初は操作が上手くできるか分からなかった。途中で、接続が切れていて、再接続に気付かないまま、ノートテイクーの順番が回ってきてしまった。接続が切れることはよくあるのでしょうか？

※原文ママ

<Q3> 今回のイベントを何をご覧になって知りましたか？（複数回答可）

JASMINE-Navi	20
学内関係者（教員・学生）から聞いて	10
その他	1

その他：Twitter

<Q4> 社会連携教育センターには聴覚障害学生支援のノートテイクボランティアチームがあります。このチームに参加していただけますか？

参加したい	24
参加しない	3

<Q5> 事前視聴の動画 や 今回の講座を受講して、講師への質問がありましたら、お書きください。後日、個別に回答をいたします。（任意）

- ・特にはないです！とてもわかりやすかったです！有難う御座いました！

<Q6> 社会連携教育センターでは、今後も様々なイベントを企画していく予定です。どのようなイベントがあるとよいと思いますか？ご自由にご記入ください。（任意）

- ・木曜日以外で休み時間など短い時間で気軽に参加できるものがあるといいなと思います。
- ・日本語サロンという難民の方を支援している団体が主催しているもの
- ・私はあまりに入力が遅いので打ち慣れてからまたノートテイクに参加したいと思っています。どのようにノートテイクが活用されるのか、どんな意味があるのか今回のように説明していただけるといいなと思います。
- ・当事者の家族の方のお話を聞く機会、？があるといいかなってちょっと思いました
- ・実際に手話を使って会話をする練習や、耳の聞こえない方たちとも楽しめるような会食。

※原文ママ

イベント名：ノートテイク養成講座

日 時：2023年9月28日（木）13：30～15：00

場 所：対面開催（JWUラーニング・コモンズかえで）

参加人数：4名

アンケート：4件（回収率：100%）

<Q1> 本日のイベントにどのくらい満足していますか？

満足	3
やや満足	1
やや不満	0
不満	0

<Q2> 今回のイベントにご意見・ご要望・ご感想がございましたらご自由にお書きください。（任意）

- ・難聴者の方の観点を知り、授業を聞くことが当たり前ではないことを感じた。
- ・打ち慣れてないカタカナの用語などは、打ち直しても誤字だらけで難しかったです。私たち健聴者は、気を抜いていてもなんとなく情報が頭に入ってくるけど、聴覚に困難を持つ人は文字でし

か情報を得る機会が無いので本当に大変だと思いました。

※原文ママ

< Q 3 > 今回のイベントを何をご覧になって知りましたか？（複数回答可）

JASMINE-Navi	4
学内関係者（教員・学生）から聞いて	0
その他	0

< Q 4 > 社会連携教育センターには聴覚障害学生支援のノートテイクボランティアチームがあります。このチームに参加していただけますか？

参加したい	3
参加しない	1

< Q 5 > 事前視聴の動画 や 今回の講座を受講して、講師への質問がありましたら、お書きください。後日、個別に回答をいたします。（任意）

- ・日本だけではなく、他の国でもノートテイクといった活動が活発ですか？

< Q 6 > 社会連携教育センターでは、今後も様々なイベントを企画していく予定です。どのようなイベントがあるとよいと思いますか？ご自由にご記入ください。（任意）

- ・日本だけでなく、海外での社会活動があったらとても参加したい。

※原文ママ

イベント名：JAL社員と考えるSDGs

日 時：2023年11月16日（木）13：30～15：30

場 所：対面開催（JWUラーニング・コモンズかえで）

参加人数：32名

アンケート：30件（回収率：94%）

< Q 1 > 日本航空講師による、講座全体の満足度をお聞かせください。

とても満足した	28
満足した	2
満足しなかった	0
全く満足しなかった	0

< Q 2 > 問1の回答の理由を具体的にお聞かせください。

- ・私たちの意見をまとめ、言語化して下さったのがとてもわかりやすかったから。
- ・グループワークで普段遠くの問題に感じているsdgsを、自分自身の問題として捉えて面白い意見を沢山出すことが出来たから。
- ・JALという会社についても、SDGsについても、JALとSDGsがどのように関わっているか、また実際にグループワークで考えることができ、素敵な機会でした。
- ・JALの事業内容を詳しく知ることができたため。

- ・ JALの事業内容に興味があったので、事業内容を知れると同時にSDGsにも触れることが出来て、とても満足度の高い講義でした。
- ・ 2時間という時間をあつという間に感じるほど中身の詰まったとても有意義な内容でした。
- ・ 日本航空の地域活性化への取り組みの多さに驚いたとともに、航空会社という強みを活かした取り組みを考えることができたから。
- ・ 講義の内容はもちろん、講義を進めてくださったJalの社員の方が、楽しそうにJalの仕事についてお話ししていたのが印象的だったから。
- ・ 取っ付きにくいと思っていたSDGsが身近な話に感じられた。
- ・ JALグループの様々なSDGsの取り組みを学ぶことができたため。
- ・ 価値を感じる時間と仲間作りができたという点からの満足です。まさにJALの目指す満足だったと思います。
- ・ JALさんの強みなどを知ったうえで、SDGsにどのように貢献することができるのかについて深く考えることができたため。
- ・ JALを初めて聴いた人に対しても丁寧に解説してくださったから。
- ・ 一方的な講義ではなく、双方の意見交換のような講義でとてもためになりました。
- ・ JALにおけるSDGsの具体的な取り組みを知ることができたから。地域活性化の重要性も知ることができ、充実した時間を過ごすことができたから。
- ・ 講師の先生が分かりやすく講座を展開してくださったから。
- ・ 日本航空についてはもちろん、日本航空のSDGSへの取り組みをととても詳しく知ることができたため。
- ・ JALのことも考えながら、地域活性化させるためにはどうしたらいいかをチームで考えることができたから。
- ・ JALの取り組みについて詳しく知ることが出来、特にSDGsや地域貢献されているお姿に未来に向かって、という前向きな社風が感じられて有意義な時間となった。また、グループワークも新たな視点に気付かされた。
- ・ JALのSDGsについての取り組みを具体的に知ることができた。
- ・ 元々、地域活性に興味を持っていたのですが地方出身ということもあり、住んでいる側からの視点で考えていることが多かったです。関係人口として、都心に住んでいる人々にとっては、私たちが普通だと思っていた農業や文化も、見方を変えるだけでその土地オリジナルのものとして輝くのだと新たな発見になりました。
- ・ JALが取り組む飛行機以外の仕事について新しく知ることができたから。また、グループディスカッションや他班の発表を聞くことで新たな発見をし、とても楽しむことができたから。今回のイベントをきっかけにグループの人と仲良くなれたから。
- ・ JAL様の農業のお話しが大変興味深く、関係人口を増やす取り組みについて私自身も貢献したいと思いました。
- ・ SDGsという観点から、JALさんが実際に行っている事業を詳しく知るきっかけになりました。飛行機自体は普段からよく利用させて頂いていますが、JALさんの提供するSDGsに関する取り組みに、実際に体験する側として参加してみたいとも感じました。具体的にアイデアを交換し、社員の方々に認めて頂く体験は貴重で、実際に働いていらっしゃるからこそその観点から学ぶことができたのは、これからの自分のキャリアにつながる大切な学びになりました。
- ・ SDGsだけではなく、日本航空に関しても最初にお話しいただき、大切にされていることやテーマを教えていただいたことで、日本航空全体がどのような意識を持っているのかを知ることがで

きたため、大変勉強になる時間でした。

- ・座学から、日本航空さんが取り組まれているSDGsに関して、初めて知ることが多く、この機会に学び吸収することができて良かったです。また、グループワークを通して、各々の意見を受容して楽しくチームとして1つの意見にまとめ上げることができ、達成感を感じました。
- ・今まで、日本の各大手航空会社の仕事内容、独自の取り組み等で違いは何なのか理解していなかった自分がいたが、今回の講義を受けさせていただいて、JALさんはSDGsに積極的に取り組まれていること、特に地方出身者（青森県）の私からすると地域と密着した取り組みに従事されていることを知り、親近感が湧いたとともに青森県の魅力を知ってもらえるお手伝いをしてくださっていることに感謝の気持ちにいっぱいになった。貴重な機会をありがとうございました。
- ・講師の方々がそれぞれの意見を否定せずより深めてくださった
- ・新しい意見や知識を得ることができたため。
- ・私はSDGsや地方創生に関心があるため、世の中の企業がどのような取り組みをしているのか知りたいと思いこの度の講座を申込みました。今回はJALさんの具体的なSDGsについて知ることができ、航空をきっかけにして様々な領域で地方との結びつきがある事が分かりとても勉強になったからです。また、グループワークを通して、同じ班の方や他の班の方と考えを共有する事ができ、様々な可能性があると感じる事ができたことも有り難く思いました。

※原文ママ

< Q 3 > この講座を他の学生にも薦めたいと思いますか。

強くそう思う	25
そう思う	5
あまりそう思わない	0
全くそう思わない	0

< Q 4 > 問3の回答の理由を具体的にお聞かせください。

- ・グループワークの機会はあまり無いため、いい機会になったから
- ・ためになったなと思いました！
- ・航空業界や、SDGsに興味がある方が受講することで、より業界やSDGsについて知ることが出来ると思うからです。
- ・インターンなどで実際に行うような活動が体験できたから。
- ・SDGsや航空業界に興味のある人はとてもためになる講義だと思います。
- ・グループで、チームで取り組むという経験ができました。
- ・チームワーク力を体験することができ、初対面の仲間とも良好にチーム課題に取り組むことができたから。
- ・Jalが、飛行機のことだけでなく、地域に対する取り組みもしていることを知って欲しいから。
- ・JALの知らない側面を知ることが出来ると思った。
- ・企業がSDGsを推進するための取り組みなどはよく聞かすが、その中でも、関係人口に焦点を絞った講座は今までなかったため。
- ・自分にもできる活動だと思ってもらいたいからです。
- ・JALさんは多くの人がある旅客事業のほかにも様々な事業を行われていて、そのような面を知った上で興味を持つ学生は多いのではないかと考えたため。
- ・私達の世代も都市部へ流出後しているため、一人一人が考えるべき課題だから。

- ・とても楽しく航空業界とSDGsの繋がりについて考えることが出来ました。ぜひ他の学生にも薦めたいです。
- ・グループで関係人口の増加策について、考えることによって、さまざまな案について考えることができて、より深い学びができるから。
- ・SDGsは航空業界だけでなく、どんな業界に就職したとしても知っておくべき知識だと思うから。
- ・JAL社員の方の優しい雰囲気や何か質問はありますか？とテーブルまで来てお話を聞いてくださる姿勢にとても魅力を感じたため。
- ・初めて知り合った人たちと議論する上で、とても雰囲気がいい中で議論することができたから。
- ・SDGsのこと、地方活性化のことの知識が増えると共に、このような案を考える機会は私生活ではなかなかないと考えるため。
- ・SDGsに関わりがなかった人でも自分ごとと捉え、できることをグループワークや社員の方々の話から考えられたから。
- ・JALに興味を持っていたり、SDGsであったり、幅広いところから地域について考えていくことで新たな考え方を学ぶことが私自身もできたから。
- ・たとえJALに興味がない人でも新たに得ることが多いと感じたから。
- ・JALの見方が変わるきっかけになると思うためです。
- ・先輩や同級生を含め、様々なアイデアの共有をし、より実践的な考え方を得ることができました。また、JALの社員の方々の経験や取り組みを聞き、社会に出た時の自分を想像して、自己のキャリアと向き合うきっかけにもなりました。
- ・今までSDGsについて深く考えたことがありませんでしたが、今日のセミナーを通してSDGsをより身近に感じられたからです。
- ・まず、日本航空の社員の方が大学へお越しいただける機会が貴重でしょうし、その上で、今後さらに重要度が増すSDGsを、自分ごとと捉えられるプログラムだったので大変勉強になると思ったからです。
- ・航空業界について興味がある人だけではなく、それ以外の人も独自の取り組みをされていることを知ることで、飛行機の利用の目的が変わってくると思ったから。
- ・JALのSDGsについてより自分事として考えることができたから。
- ・より意見を広げることにつながると考えたため。
- ・学年関係なく、SDGsは今後の社会において重要な考え方であるため、それを学ぶきっかけにする講座としてとても意義があると思ったから。航空志望の方は企業理解に繋がり、仮にそうではない方でも、JALさんという大手航空会社の先進的な取り組みについて知ることはいい経験になると思うから。

※原文ママ

<Q5>この講座を受ける前の航空業界（あるいは日本航空）の印象を教えてください。

大変良い	20
良い	10
どちらでもない	0
悪い	0
大変悪い	0

<Q6>この講座を受けた後の航空業界（あるいは日本航空）の印象を教えてください。

大変良い	26
良い	4
どちらでもない	0
悪い	0
大変悪い	0

<Q7>問6回答で変化した（または変化しなかった）理由について具体的にお聞かせください。

- ・もともと良い印象だったのが、さまざまな社会貢献の取り組みを知り、さらに良いイメージを抱くようになった。
- ・もともと名前をよく聞く企業だったので、いいイメージは持っていたが、今回の企画に参加して、色々な事業に積極的に参加するいい企業だと思いました。
- ・航空業界で働きたく、今回受講しましたが、輸送事業以外にも様々な事を行っているJALさんにより魅力を感じました。
- ・飛行機を何度も利用していたため、ブランドの知名度や評価は元々高かった。
- ・航空業界はキラキラしているけれども、大変な部分が大いかなという印象でしたが、大変な分やりがいがある業界であると再認識しました。
- ・より深くJALさんの地域活性化への取り組みについて理解でき、自分が入社できたらこのように地域と関わることができたり、キャリアステップができるのだろうと思いがより強くなりました。
- ・航空事業だけではなく、地域活性化を通じて持続可能な社会の実現に取り組まれている姿にとっても関心を抱いたから。
- ・Jalを利用すると、CAの方など非常に素敵な対応をしてくれるが、実際に大きなやりがいを持って働いていることを知ってさらにJalを好きになった。
- ・元々知らなかったJALの取り組みについて色々知ることができたから。
- ・旅客、貨物事業だけでなく、その他の地域活性化などにも焦点を当て、精力的に活動されていることを学べたため。
- ・元々おもてなしの面で素晴らしいサービスがあると知っていたが、ただのおもてなしではなく、環境保護や人々への価値ある経験を与えるという活動を重視していることを今回学んだから。
- ・表面的にしかJALさんの事業について知らなかったため、JALさんがどのような理念をもとに航空会社ならではの強みを活かして社会に貢献するかを考えているということを知ることができたため。
- ・関係人口というキーワードを耳にし、地元やそれ以外の地域との繋がり大切さを学んだから。
- ・航空業界は航空業だけのイメージが強かったのですが、それだけではなく地域との繋がりを密に感じられて、より航空業界の素晴らしさを感じる事が出来ました。
- ・日本航空には、素晴らしいSDGs策があることは、知っていたが、今回詳しく知ることができた。
- ・日本航空を志望先の一つと考えていたが、より貴社の魅力に触れ志望度が高まったから。
- ・日本航空はもともと興味のある会社だったが、実際に社員の方とお会いしてきめ細やかな心遣いを肌で感じ、やはりいい会社だなと改めて感じる事ができたため。
- ・JALを使って旅行をよくする身なので、JALのサービスは知っていたつもりだったが、想像以上に幅広い事業を行っているを知ることができたから。
- ・元々、人想いの社風であったり、優しいJALというところは存じていたが、今回参加したことに

よってJALの優しさ、地域の人や旅する人を想う人想いな姿勢をさらに強く実感した。また、今回未来に向かって、という前向きに挑戦されているお姿も新たに学ぶことが出来、より良いイメージを抱いた。開催して下さった細野さま、田中さまのお人柄からも感じる事が出来た。

- ・元々JALのイメージが良かったが、地域に貢献していることやさまざまな取り組みをしている事を知り、更に魅力的な会社だと考える。
- ・まだ、空港業界について今回の授業での知識しかないため、今後さらに調べてくわしかりたいと思ったから。
- ・JALは少し高貴で堅いイメージがあったが、講師のお二人から優しさや温かさ、また、ユーモアを感じたり、また、JALが地域との関わりを大切にしていることを知り、JALに対し親しみが増したから。
- ・航空業界の事業領域の広さに驚きました。また、視野が広がり楽しかったためです。
- ・航空業界には以前から興味があり、今回参加したのもその関心によるものでしたが、航空業界としての強みを活かして、社会的課題に向き合い続けている企業としての姿勢がとても素敵だと感じました。これからも搭乗するだけでなく、JALさんの会社としての取り組みにも目を向けて考えていきたいです。
- ・元々日本航空の方々が様々な取り組みで社会貢献をされているイメージはありましたが、今日のお話の中でより具体的にそれらの内容をお聞きすることができたからです。
- ・航空業界、とりわけ日本航空さんにもともと興味があり、就職活動をする中で、選考も考えてる企業であります。もとより日本航空さんの素晴らしさは理解していましたが、この講座を受け、自分が思っている以上にSDGsに取り組まれていることを知ったから、印象は変わらず「大変良い」です。
- ・JALさんの飛行機には、乗ったことがなかったのですが、丁寧なおもてなしを大切にしているイメージがあった。講義が終わってから、そのイメージとともに、自分の会社の利益だけではなく、未来の日本をよりよくするために何をすればいいかも踏まえた取り組みをされているということで、社員全体が働くことの意義を感じられる会社で素晴らしいと思ったから。
- ・エアラインスクールに通っており、JALの人柄の良さについて更に知れた
- ・航空業界について特に知識がなかったものの、今回の講義で想像していた通り講師の方や取り組みの様子が前向きである事がわかったから。
- ・以前、マイナビさん主催、本大学でも連携して行われた課題解決プロジェクトに参加して、JALさんの取り組みを知る機会があり、新たな価値創造や地域貢献など、先進的な活動について知ることができました。今回はSDGs、地域活性化に焦点をあてて、より具体的な取り組みについて知ることができたのでさらに理解が深まったように思います。

※原文ママ

<Q8>この講座をより良いものにするため、ご意見・ご感想をぜひお聞かせください。(任意)

- ・また日本女子大学でこの講座を開いていただきたいです。充実した2時間でした。
- ・とても良かったです。
- ・世界中に対してでも自分の意見を発信できる講座でした。
- ・とても楽しみながら航空業界、そしてSDGsについて考えることができました。これから、地域との繋がりや活性化させる活動について考え、少しでもGOALに近づきたいというふうに思いました。
- ・本日は誠にありがとうございました。航空業界を就職先の一つとして考えていたことから参加致

しましたが、SDGsにも関心を持つきっかけとなりました。また、地方活性化の取り組みを通して日本全体を良くしていこうとJALグループ一丸となってお仕事に取り組まれているのを身をもって実感しました。

- ・とても有意義な時間をありがとうございました。2時間があったという間でした。また機会がありましたら、もっと長い時間お話を伺ったり、講義を受けたいなと思いました。
- ・緊張せず、雰囲気もすぐ打ち解けて議論することができた。内容も学生が考えやすく、また学生らしい意見が出たと思う。
- ・2時間では物足りないほど大変有意義な時間でした。本日はありがとうございました。
- ・社員の方々も穏やかで、また気遣い頂き素敵な人が働いている会社だと改めて思いました。また、動画を見せて頂けるなど、とても分かりやすい説明でした。時間があったという間に感じ、時間が許せばグループワークではもっと意見交換出来たのではないかと思います。
- ・地域と関わっていく上で、お互いが納得して同じ方向を向いて盛り上げていく必要性を感じました。住んでいる環境が違となると、思い合ってもズレが出てからと思います。そのズレをプラスにして、盛り上げるアイデアにしていくことで、新しい活動などを見つけられるのではと学びになりました。本日はありがとうございました。
- ・とても貴重な体験になりました。この度は私たちのために講義をしてくださりありがとうございました。
- ・大変有意義な時間になったため、ぜひ今後も開催していただけると嬉しいです。
- ・特にございません。貴重な機会のご提供をありがとうございました。
- ・事前の掲示について、今回、ジャスミンナビでの掲示が削除されており混乱がありました。前日だけでなく、1週間前のリマインドもあるとありがたいです。
- ・この度は貴重な機会を頂き誠にありがとうございました。SDGsについて自分ごとと考える良い機会になり、大変勉強になりました。グループワークの発表について、考えた案を纏めきれず話せなかった部分がありました。こちらの実力不足ではあるのですが、発表時間がもう少し長いとより他の班の方の案も詳しく聞く事ができて良いのではないかと思います。

※原文ママ

イベント名：サンタさんからのSOS

日 時：2023年12月9日（土）13：30～16：00

場 所：対面開催（JWUラーニング・コモンズかえで）

参加人数：21組（近隣参加11名・お子様13名・保護者12名）

アンケート：15件（回収率：71.4%）

<Q1>今回のイベントをどこで知りましたか？（複数回答可）

友人の紹介	4
メールマガジン	4
チラシ	4
町会のお知らせ	4
その他	1
X（旧：Twitter）	0

<Q2>本日のイベント内容で良かったものはなんですか。(複数回答可)

ポッチャ	10
工作	4
クイズ	3
ゲーム	2

<Q3>本日のイベントは楽しんでいただけましたか。

大変満足	11
満足	3
不満	1

<Q4>「Q3」の理由をお聞かせください。

- ・親子で参加できた。地域の方とも触れ合うことができた。
- ・この短い時間の中で、初めて出会えた方々と仲良くなれたので
- ・色々な企画を通して、同じテーブルの方と大変仲良くなれました。
- ・多くの学生さんが参加して、場の雰囲気を和ませてくださった。
- ・ご近所の3世代で交流できとても有意義でした。
- ・何にも考えなく、前知識もなく参加して子供たちと遊ぶ機会は皆無なので楽しかったです
- ・知らない人でしたが、一緒にチームになって話をしたり地域の情報交換をしたりできてよかった
- ・大人も子供も楽しめる内容盛りだくさんでとても満足できました。
- ・子どもがとてもたのしんでいました
- ・子供が終始楽しそうにニコニコしていました。色々な世代の方と過ごす事ができ貴重な大変になりました。
- ・楽しい、ひとときをすごすことができました。ありがとうございました
- ・ボランティアのお姉さん達が本当によく助けてくれました。クイズの内容が三世代によく分かりおもしろかった。工作も楽しかった。調度いい内容だった。

※原文ママ

<Q5>本日のイベントにどのようなご興味があり参加されましたか。(複数回答可)

クリスマスのイベントに参加したかったから	6
地域とのかかわり(つながり)が欲しかったから	6
イベント内容(クイズ・ゲーム・工作・ポッチャ)に興味があったから	5
家族で思い出をつくりたかったから	3
大学生と交流したかったから	3
福祉に興味があったから	3
日本女子大学に興味があったから	2
友達と一緒に参加したかったから	2
コロナ禍でイベントがなかったから	1
無料だったから	1
その他(何というゼミだろうと思って)	1

<Q6>本日のイベントは社会福祉学科地域福祉ゼミの学生が企画しました。イベントを通して多世代交流の良さを感じていただけましたか？

非常にそう思う	9
そう思う	5
あまり思わない	0
思わない	0
わからない	0

<Q7>あなたは、どのような地域とのかかわり（つながり）を望んでいますか？教えてください。

- ・ 困った時や災害時に助け合えること
- ・ 困ったことがあった時に助け合えたり、楽しいことを共有したりする関わり
- ・ 子供の顔を知っている地域の方が多く防犯になったり、子供が困った時に助けになっていただけたり、災害時に協力しあえるようなかかわり。
- ・ 先住民が新規入居者を温かく迎えて新しいお付き合いができる関係を築くこと。
- ・ いつでも誰れとでもあいさつできる明るく楽しく特別な時ではなくても笑顔で助け合える地域
- ・ 大学生との交流がないのでたのしかった
- ・ 初めて出会う人とも楽しくすごせる時間が大切だと思います
- ・ 地域に住んでいる学生さんとの交流はたのしいと思いました
- ・ 普段かかわりが少ないシニア世代
- ・ 年代をこえた交流
- ・ 地域を盛り上げるイベントに参加したいし応援したい。

※原文ママ

<Q8>大学でこのようなイベントがあればまた参加してみたいですか。

はい	14
いいえ	0

<Q9>本日のイベントについて自由なご意見・ご感想をお聞かせください。

- ・ こんな楽しい時間をありがとうございました。久しぶりの工作時間に夢中になってしまいました。ボッチャも、チームワークが最高で、優勝できました！本気で嬉しかったです。
- ・ たくさんの企画のご準備、本当にありがとうございました。親子でとても楽しい1日を過ごすことができました。
- ・ ありがとうございます。お忙しい中に企画くださり感謝です。
- ・ 準備も大変だったと思いますが楽しくすごさせていただきました。
- ・ 毎年このようなイベントがあるといいです
- ・ 工作だけでなくボッチャもクイズも全て楽しかったです。
- ・ 時間が長いかと思いましたが、休けいもあったので最後まで楽しめました
- ・ とても楽しかったです。
- ・ 楽しかったのひとことです。
- ・ 告知が全く掲示されていなかったのも、シークレットイベントだったのかな。運営的にも人数を限らないとできないとは思いますが、是非周りにも教えてあげたいくらい楽しかったです。

<Q10>社会連携教育センターでは、今後もいろいろな企画をしていく予定です。どのような企画があるとよいか、ご自由にご記入ください。

- ・何かを作るワークショップ、大学でのオリエンテーリングやスタンプラリー、茶道や華道の体験など。
- ・地域イベントへのご参加の機会がありましたらお願いします。
- ・お料理・音楽・歌など
- ・夏祭り、ハロウィンなど。
- ・子どもが参加できる企画
- ・いろいろな遊びを通じて交流していく企画をしてほしい。
- ・子供参加のwork shop、夏祭り、大学でのクイズオリエンテーリング、宝探し、歴史を巡る旅

社会連携活動支援助成について

自主活動推進プロジェクトチーム 藤井雅子
文学部史学科教授

2023年度で「社会連携活動支援助成」の実施は3年目になりました。今年度より、当制度の運営は、社会連携教育センター下の自主活動推進プロジェクトチームが中心となり、選考方法の検討や審査を行いました。そして新たな試みとして、活動地域を区分して、「近隣（一都三県）」には助成金10万円、「遠方地域」（1都3県以外の地域、本学包括協定提携地域（北海道日高管内 7町・高知県梶原町）、被災地復興地域等）には20万円という方式で募集を行いました。その意図としては、多くグループの募集を期待するためであり、また多彩な活動を支援するためです。

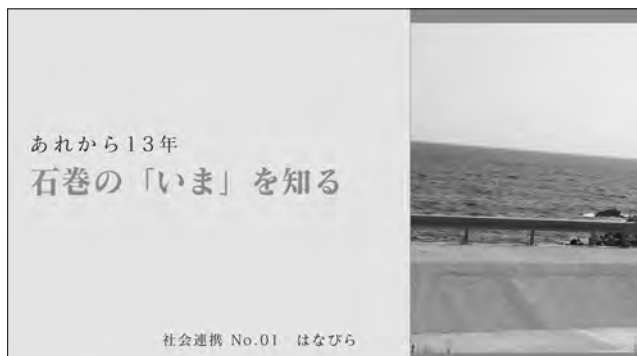
その結果、昨年度の応募総数6件を大幅に上回る、12件の応募がありました。書類選考の結果、そのうちの8件に絞られた後、面接を経て、次の6件のグループが採択となりました（条件付2件を含む）。

- 1、家政学部児童学科 北海道日高管内の保育施設における運動支援活動（遠方・北海道日高管内）
- 2、文学部史学科 鴨川市のお寺で経典整理ワークショップ（近隣・千葉県鴨川市）
- 3、家政学研究科住居学専攻 唐丹の地域住民に向けたかるたワークショップ（遠方・岩手県釜石市唐丹）
- 4、文学部史学科 北海道から離れた地域にアイヌ文化をひろめる（遠方・北海道日高管内）
- 5、人間社会学部文化学科 東日本大震災の被災地の現状を大学生に伝える（遠方・宮城県被災地）
- 6、家政学部家政経済学科 ドギーバックの認知・普及（近隣）

残念ながら、採択されなかったグループも工夫を凝らした企画でしたが、社会連携において課題があったり、貢献の上での効果が不安視されるなどの理由から、問題点を指摘し、それらの解決方法などを指導することで、次年度以降の活動につなげてもらうように意見を伝えました。

採択された6グループの活動報告会は2024年3月7日（木）に行われました。いずれのグループも大学で専門に学んできた内容をうまく活用しながら、成果を社会に還元することができており、有意義な活動がなされたことがうかがい知れました。一方では中には実際に活動する中で、予想外の問題に突き当たり、現実の厳しさを味わったりしながらも、軌道修正したり、工夫を行ったりして柔軟に対応したグループの活動も報告されました。まさにこうした経験が重要な学びであり、社会と連携する上での現実なのだと感じてもらえればと思いました。

今後も学生らの自主的な社会貢献活動を支援できるように、制度のさらなる整備や新たな試みを行って参りたいと考えています。今後ご支援ご協力のほどよろしくお願いいたします。



社会連携活動支援助成スケジュールおよび採択テーマ一覧

【スケジュール】

募集期間：2023年6月5日（月）～6月30日（金）17：00

（書類選考→面接選考→採用発表）

活動説明会：2023年7月27日（木）13：00～14：30

活動報告会：2024年3月7日（木）13：00～14：30

【採択テーマ一覧】

- 東日本大震災の被災地の現状を大学生に伝える
- 北海道日高管内の保育施設における運動支援活動
- ドギーバックの認知・普及
- 鴨川市のお寺で経典整理ワークショップ
- 唐丹の地域住民に向けたかるたワークショップ
- 北海道から離れた地域にアイヌ文化を広める

東日本大震災の被災地の現状を大学生に伝える

申請No. 01

人間社会学部文化学科2年（3名）

1. 活動概要と活動の目的

- ・実際に石巻市を訪れて行った取材を基にリーフレットと動画を作成する。
- ・作成物によって石巻市の魅力を大学生に伝えることで「被災地」というレッテルを抜きにしたありのままの石巻市に興味を持ってもらい、実際の現地訪問に繋げる。

2. 活動の記録

2023年

採択後～9月 既存の動画資料を参考に詳細な制作物の方向性の確定、石巻市の情報収集

9/17～9/19 現地での動画の撮影及び関係者への取材

取材後～11月 作品の制作

12月 取材先各位による制作物の内容確認・修正

2024年

1月 リーフレットの発注、動画データのDVD化・先方への制作物の発送

1/19 昼休み JWUラーニング・コモンズかえでにて制作物の発表

3. 具体的な活動内容

- ・現地での撮影及び関係者への取材

関係者各位に撮影の許可を取り、9/17～9/19の3日間で撮影及び関係者への取材を行った。撮影と取材の概要は以下の通り。

- ・撮影実施場所:

石ノ森萬画館、日和山公園、石巻市震災遺構門脇小学校、
いしのまき元気いちば、Café Grain、田代島

- ・取材協力者（敬称略、五十音順）:

高橋広子（石巻市総務部震災伝承推進室主幹）
松本俊彦（株式会社元気いしのまき代表取締役副社長）

- ・関係者への取材における主な質問内容:

震災当時と現在の様子

活動内容について

石巻市の魅力

大学生にひとこと

- ・zoomを使用した取材

現地での撮影及び関係者への取材に加え、zoomを使用して2023/10/18に石巻市役所産業部観光課主任主事である武山貴信氏にも取材を行った（質問内容は対面での取材と同様）。

- ・取材内容を基にしたリーフレット、動画の作成

リーフレットは観光地に設置されているガイドブックを参考にA5サイズの蛇腹折り6山仕様で制作。表面には石巻市の情報と撮影を行った各地の紹介文、裏面には撮影地の関係者各位へのインタビュー内容を掲載した。

動画は現地で撮影した映像をより印象付けることを目的に、Vlogの形で制作。上映会で流すことや視聴者の動画への集中を考慮し、動画の長さは約10分とした。

・制作した映像の上映及びリーフレットの配布

1/19、日本女子大学構内のラーニング・コモンズかえで簡易的な活動紹介と作成した映像の上映を開催した。合わせてリーフレットも配置し、制作物の紹介を行った。また、社会連携室の協力により上映会終了後にも引き続き同所でリーフレットの設置と動画の上映を行っている。

4. 活動の総括・上映会当日のリアクション

本グループでは上記のような日程で活動を行い、撮影及び制作、制作物の発表と先方への納品において大きなトラブルなく完了した。上映会当日には上映後に石巻に対する肯定的な感想や興味を持ったという声が上がったため、この活動を通して石巻の魅力を伝え興味を持ってもらうという目標は達成できたと言えるだろう。



北海道日高管内の保育施設における運動支援活動

申請No. 02

家政学部児童学科3年（7名）

私たちは、北海道日高管内に住む子どもたちの運動習慣の改善に寄与したいという思いから2023年7月から事前準備を初め、2023年8月30日、31日に館内の様似町と襟裳町にて活動を行った。子どもたちの健康問題を扱うゼミの学修において、寒冷積雪地域である北海道に住む子どもたちは積雪期に極めて体力が低下しやすいということを知り、幼児期の運動習慣は就学期以降の健康維持に大きな役割を持つため、降雪期に室内でもできる運動遊びを知って楽しさを味わってもらいたいと考えた。幼児期には様々な身体の動かし方を経験することが望ましいため、「はう」「投げる」「跳ぶ」といった全身を使う運動遊びを伝えようと当日へ向けて事前準備を重ねた。特に運動遊びに用いる道具は幼児に相応しいものとなるよう、皆で協力し製作した。

当日、まずは様似町立幼児センターに訪問し3・4・5歳児それぞれ年齢ごとにプログラムを進めた。初めに準備運動として東京の文化を知ってもらうよう「東京音頭」に合わせて簡単な振りを付けたものを真似して踊ってもらった。みんなで動きやリズムを共有し一体感を味わえるよう円になって踊るという工夫を取り入れた。次に、室内でも「投げる」動きを促す「それゆけ！元気レンジャー」では、幼児が親しみを持てるよう手作りの的に生活習慣に関わる3体の悪者を作って貼り、危険性のないスポンジボールを用いて悪者を倒すというゲーム感覚で楽しめるよう工夫した。また発達の状況に応じ年齢ごとに投げる位置を変えて行った。次に普段あまり行かない「はう」動きを自然と引き出せるよう考案した「取ってハイハイおつかいレース」では4本足の動物になりきって欲しいことを伝え、スムーズにはう動きを引き出すことができた。そして「跳ぶ」動きを促す「北海道をじゃーんぶ」では距離や回数を発達段階に合わせて調整できる道具を用いて、片足踏切や両足踏切でのジャンプで楽しんでゴールまで進めるよう工夫した。

様似町での活動後は襟裳町私立光の園幼稚園を訪問した。園児数が少なかったため、同様のプログラムを3・4・5歳児合同で行った。それぞれの運動遊びを難易度を変えずに行ったところ、はう、跳ぶ動きを含むゲームでは年齢ごとにゴールするまでの時間に差は見られたが、異年齢の子ども同士でコミュニケーションを取り楽しむ様子が見られた。なお、活動後も継続して園で遊べるよう使用した道具は園に寄贈し、家庭内での遊びの機会を増やしてもらうため、実際に活動で行った運動遊びを家でも簡単に身近なもので行えるよう道具の作り方や遊び方をまとめた動画を制作し、QRコードを掲載してお便りを作成した。お便りは各園で保護者の方に配布して頂いた。

初めは「一緒に楽しんでもくれるか」「運動遊びの難易度は相応しいのか」など不安と緊張を抱えていたが、活動当日はどのプログラムも「もう一回やりたい！」という声が聞こえるほど楽しむ様子が見られ、子どもたちとの仲も深めることができ、今回の活動が有意義なものであったと感じることが出来た。今回の活動を通して得た幼児の年齢ごとの発達の状況や運動遊びへの意識などの学びを活かしてさらなる研究を深めていきたいと考える。



準備運動「東京音頭」



「それゆけ！元気レンジャー」



「取ってはいはいおつかいレース」

ドギーバッグの認知・普及

申請No. 05

家政学部家政経済学科3年（10名）

小林ゼミでは、ドギーバッグの認知・普及活動を行った。以下、ドギーバッグ普及の現状から立てた目標、そして活動内容を述べる。

今日本で問題視されている食品ロスだが、その現状を解決出来ると言われているのが、「ドギーバッグ」である。これは、外食時に食べきれなかった料理を持ち帰る為の袋や容器のことを指す。ドギーバッグは、食品ロス削減による環境への負荷軽減だけでなく、消費者が食べ過ぎることの防止や、飲食店側の廃棄コスト削減にも繋がる。

そんなドギーバッグの認知度だが、ドギーバッグ普及委員会が2016年に行った調査では、ドギーバッグを知っていると答えた人は全体の50%、その中でも内容まで理解している人は25%と、依然認知度は低い現状がある。

そこで私達は、ドギーバッグの普及と現状理解をするという目標を立てた。ドギーバッグを用いて、食べきれなかった料理を持ち帰ることを認めている持ち帰り協力店を増やすことで、食品ロス削減に貢献すること、どのような要因がドギーバッグ普及の課題としてあるのかについて現状を理解することを目的とした。

活動内容として、米専門商社である株式会社アスク様に協力していただき、飲食店に対しドギーバッグの普及活動を行った。新米に関する広告を取引先の飲食店の方に送る際に、私たちの活動やドギーバッグを説明するチラシを同封していただき、興味を持ってくださった飲食店の方と連絡を取った。飲食店の方からはドギーバッグに賛成する声がある一方、食べ残しが増えて逆効果だという声もいただいた。

また、実際に飲食店を訪問し、NPO団体であるDiversity Word様が運営する「メシエア」というポータルアプリに掲載していただく、広域への認知拡大を狙う活動を行った。訪問エリアを5か所選定、2人1組で飲食店を訪問し、食べ残しと持ち帰りの現状、またその理由について伺った。結果として、訪問した66店舗中18店舗が持ち帰り協力店になっていただいた。協力店にならなかった飲食店側の理由として、食べ残しがそもそもないこと、食中毒による風評被害が心配であることが挙げられた。

これらの活動を通して、現状は飲食店側、消費者側共に「ドギーバッグ」「残った食べ物を持ち帰る」の普及は図れていないことが分かった。それに伴い、ルールの周知が出来ていないことから普及へのリスクが生じていると考えられる。今後は「ドギーバッグ」の認知拡大と共に、持ち帰りが自己責任の行動であることを周知徹底することで、風評被害を恐れての持ち帰り禁止店舗を少なくしていく必要がある。また、飲食店側だけでなく、なぜ消費者側への行動波及が少ないのかについての研究をすることで、確実な認知、行動拡大につなげていきたい。



実際に訪問し、協力店になっていただいた店舗やシール掲載の様子

鴨川市のお寺で経典整理ワークショップ

申請No. 06

文学部史学科3年（5名）

はじめに

私たち「お寺探検隊」は、千葉県鴨川市にある長安寺というお寺にて史学科の古川先生のご協力を仰ぎ、現地調査を6回実施した。年間の活動スケジュールとは予定が異なってしまったが、本年度は主に大般若経における経典整理を行うことに重点を置いた。

お寺での経典整理を通して、長安寺の節分会にも参加させていただいた。その際に檀家さんや地域の方々と交流をさせていただいた。その内容についても本稿にて合わせて報告する。

【活動内容】

◇第一回現地調査（2023. 9.14）

お寺探検隊は、第一回の現地調査の際に初めて長安寺へ伺った。そのため、当日お寺に向かうまでは、長安寺にどのような史料がどのような状態でどのくらいの数の史料があるのか分からない状態であった。よって、第一回の調査では、お寺にある史料に目を通し、様々な史料の中から適切な保存整理が求められる史料を選択した。

◇第二回現地調査（2023.10.14～2023.10.15）

第二回の現地調査では、第一回の調査に引き続き、お寺にどのような史料が遺されているのかを把握するために、目録作成を行った。

史料整理を行う中で600巻の大般若経が存在することを発見した。発見時は、巻が順序よく並んでいなかったため、一巻から順に整理を行うと同時に大般若経の状態を確認した。

◇第三回現地調査（2023.11.22～2023.11.23）

第二回の現地調査終了後、お寺探検隊のメンバーと協議をした結果、「本年度の活動では、600巻に及ぶ大般若経の整理、清掃、目録・データ収集に重点を置いた活動をする」という方針を決めた。私たちが大般若経を初めて手にした際、温湿度の問題から発生したカビや虫による食べかすや糞によって史料の損傷がとても激しかった。そのため、竹べら、竹串、はけを用いて、一巻ごとに丁寧に経の清掃を開始した。また、お経の清掃を行いながら、一巻ごとに目録をとり、重要な箇所は写真を撮りデータ収集を行った。

◇第四回現地調査（2023.12.26～2023.12.28）

第三回の現地調査と同様に大般若経の整理、清掃、目録・データ収集を行った。第四回の調査では2泊したため、大般若経の整理を大幅に進めることができた。

◇第五回現地調査（2024. 1.28～2024. 1.30）

第四回現地調査内容と同様。

◆長安寺節分会（2023. 2. 3）

長安寺の一員として法被を着用し、檀家さんと協力をしながら朝から節分会の準備を行った。私たち

は、長安寺のお守りの販売を担当した。節分会で最も大きなイベントである豆まきの際には、お寺の方のご依頼により、台の上に上がり盛り上がっている様子を写真に収めた。節分会終了後は、鴨川市の市長とお話をする機会があり、我々が長安寺でどのような活動を行っているのかご報告した。

節分会を通じて、檀家さんや地域の方々とコミュニケーションを図ることにより、長安寺が多くの人々から支えられていることを実感することができた。

◇第六回現地調査（2024. 2.20～2.22）

第三回～第五回の現地調査時と活動内容は同じ。第六回現地調査において、無事に600巻の大般若経の整理、清掃、目録・データ収集を終えることができた。

おわりに

大学で歴史や博物館学を学んでいる「お寺探検隊」にとって長安寺での史料調査を通して、実際に史料に触れて自分の目で見るという授業では学ぶことができない貴重な経験をすることができた。史料調査によって知り得た大般若経の存在について、檀家さんをはじめ地域の方々に伝えることができた。また、ご住職と奥様、檀家さんの温かい関係性を体感し、私たちもその輪に加えていただき、長安寺についての理解を深めることができた。私たちの活動を快く認めてくださったご住職、奥様に改めて御礼を申し上げたい。

先述したように、長安寺には大般若経以外にも数多くの史料があるため、可能であれば、来年度も継続して史料調査・整理を行いたい。

唐丹の地域住民に向けたかるたワークショップ

申請No. 08

家政学研究科住居学専攻1年（3名）

1. 事前調査

岩手県釜石市は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた地域の一つである。住民の方々と町に関する知識を深めるにあたり、震災に関する人々の知見に触れるため、事前調査として津波被害を受けた旅館である「宝来館」及び東日本大震災の被害を伝える「いのちをつなぐ未来館」を訪れた。ここでは、実際に震災を経験した人々の話を伺い、甚大な被害やその後の震災復興に当たる実情や地域の人々目線での意見に触れた。同時に、震災の被害を受けた後もなおその地に住み続けるということに関して、地域の人々の町やその町を形成する自然への愛着の強さとともに生きるための努力を知り、自然と人々の共存にあたり、適切な知識の共有と自然の理解が重要であることを知った。

また、ワークショップ実施場所である唐丹町でまちの方2人にお話を伺った。教育委員長も務めた河東さんからは、地震に関する教育面より子どもたちが震災時には活躍したこと、親の多忙等により近年、知識が豊富な子どもたちと大人が災害に関する知識を共有する場が減っていることを聞き、子どもと大人がともに知識を深め、共有する場を作ることの重要性を学んだ。唐丹町で語り部をしている磯崎さんからは、唐丹にまつわる昔話を伺い、まちの歴史を知ることができた。

2. かるたワークショップの実施

2-1 かるたワークショップの概要

(1) 日時：8月4日（金）（14：00～17：00）

(2) 場所：唐丹児童館（岩手県釜石市唐丹町）

(3) 参加者：唐丹児童館の学童クラブの児童7名 職員3名

※保護者や周辺住民も参加予定であったが、学童クラブ内でコロナの流行があったため、急遽児童館の児童のみの参加となった。

(4) 内容：

災害に強いまちづくりを学ぶ「防災かるた」と唐丹の魅力を発信する「ご当地かるた」の要素を持つ『唐丹の魅力かるた』を唐丹の住民の方々と作成し、地域の子どもたちと作成したかるたで遊ぶワークショップを実施した。

(5) ワークショップの目的：地域住民の防災意識・地域への愛着を高めること

東日本大震災にて甚大な被災を受けた背景から、災害に強いまちづくり・魅力を発信するまちづくりを目的に、防災・ご当地かるたの要素を持つ魅力かるたワークショップの企画に至る。地域住民と一緒に自然災害に関する知識や地域の文化について話し合いながらかるたを作成することで、交流の促進や地域住民にとっても地域の認識や愛着を深める機会となり、地域創生に繋がると考えた。その後、子どもたちに作成したかるたで実際に遊んでもらうことで、ゲーム感覚で防災意識の共有や地域の価値や特徴を理解すること、次世代に受け継いでいくことができると思った。

2-2 ワークショップの具体的な内容と当日の様子

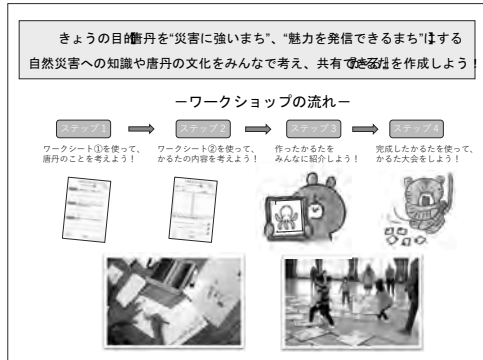
ワークショップは、(1) ワークショップの内容説明 (2) 唐丹の魅力を考える (3) かるた作成 (4) 作成したかるたの発表 (5) かるた大会の実施、という流れで行った。

あいにく、コロナ流行により児童館が7月31日（月）からワークショップ開催前日の8月3日（木）

まで閉館していた。そのため計画当初は40名が当日学童クラブを利用することが見込まれたが、実際の参加者は7名と想定より少ない参加者となってしまった。

(1) ワークショップの内容説明

はじめに自己紹介を行い、スライドを用いてかるたワークショップの説明を行った。



〈スライド〉



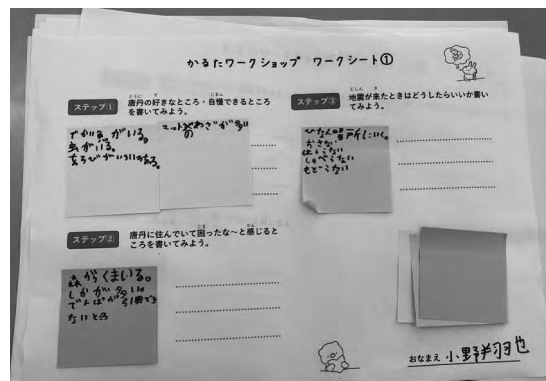
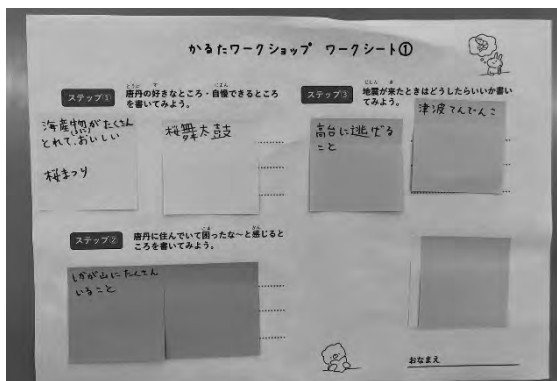
〈説明時の様子〉

(2) 唐丹の魅力を考える

ワークシート①を用いて、唐丹の好きなところ・唐丹に住んでいて困ったと感じるところ・地震がきたらどうしたらいいか、の3つのテーマについて考えてもらった。参加者同士で唐丹の魅力について一緒に考えながら作業を進めるために、主催者を含め3～5名のグループを組み、意見交換の場を設けた。



〈唐丹の魅力について考えている様子〉

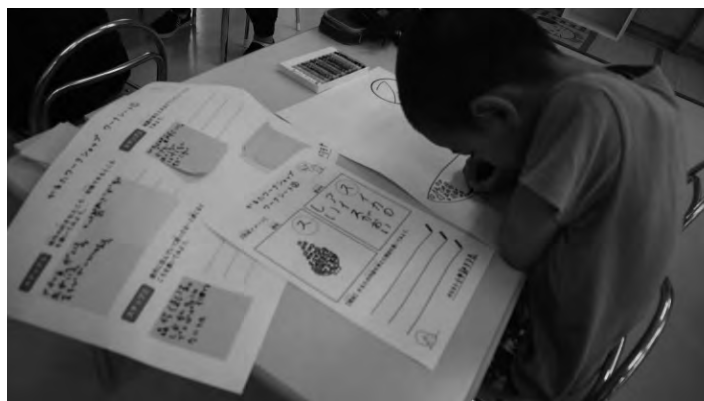


〈ワークシート回答例〉

(3) かるた作成

ワークシート②を用いながらかるたの読み札・絵札を考案してもらった。(2)で話したことを元に書きたいテーマを決めてもらい、頭文字から読み札を考案してもらった。読み札が書き終わったのちに、思いのままに絵札を書いてもらった。最後に読み札の裏に、作成者の名前とかるたの説明書きを記載してもらった。さらに学生によって読み札の裏に補足説明や話を聞いていて素敵だなと思ったことを記載した。頭文字や内容が同じかるたが複数枚できたため、絵札と読み札が一致するよう書き終わったかるたには番号を振り、絵札にはラミネートを施して完成とした。作成時間には個人差があり、早い子であれば2枚目や3枚目に取りかかる子もいた。

また、磯崎さんや河東さんが書いてくださった読み札から、参加者に絵札を書いてもらった。



〈カルタづくりの様子〉

(4) 作成したかるたの発表

完成したかるたの絵札・読み札を発表した。読み札と併せて、作成したかるたの理由を発表してもらった。子どもたちが堂々と発表している様子がみられた。



〈発表の様子〉

(5) かるた大会の実施

完成かるたを用いてかるた大会を実施した。とても楽しそうに遊ぶ子どもたちの様子がみられた。自分のかるたが読まれると嬉しそうに走って取りに行っていたのが印象的であった。頭文字を自分で選択してもらったことで同じ頭文字のかるたが複数生まれたことによりかるたの難易度が上がり、より楽しいかるたになったと感じた。



〈かるた大会の様子〉

(6) WS後

作成したかるたは子どもたちに今後も遊んでもらえるように児童館に提供した。また参加できなかった子どもたちにもかるたを作成してもらえたらと思い、かるた作成キットをかるた作成マニュアルと併せて提供した。

かるた大会後に参加者アンケート回答してもらおう予定であったが、終了時間が迫っており実施できなかったため、後日回答してもらったものを郵送していただいた。

2-3 展示

翌日（8月5日（土））に実施された唐丹町海祭りにて、海岸の一部で前日のかるたワークショップの成果物の展示を行った。海祭りでの展示は、唐丹小学校の校長らまちの様々な人とワークショップの内容を共有する貴重な機会ともなった。「よく地域のことを見ている」「○○さんはこんな絵も描けるのか」「大人たちが思うよりも色々なことをよく知っている」といった声も聞かれ、普段学校で接する先生方の前で見せる姿とはまた違った一面を見せてくれていたことを知ることもできた。年齢の近い学生と子どもたちの交流であったからこそその貴重な意見が得られたのだと考える。



〈海祭りでのかるた展示の様子〉

3. カルタワークショップ第2弾

(1) 日時：2023年12月15日11：00～13：00

(2) 場所：唐丹公民館

(3) 参加者：約40名の地域住人

(4) 目的：

地域の子どもたちが考える唐丹の魅力や防災意識を地域住民（大人）に共有する時間を設け

ること。8月のWSで子どもと大人に参加していただく想定だったが、子どもしか参加できなかったことや、かるたで遊ぶ時間を多くとれなかったことが反省点として挙げられたため、12月のWSの開催に至る。

(5) 内容：

唐丹公民館で開催されたクリスマス会のイベントに合わせて、8月に児童館の子どもたちと作成したかるたを用いたかるた大会を行った。「〇〇ちゃんが作ったかるただ！」「唐丹のウニは一流だ！」などの声がみられ、地域住人の方が楽しんでいる様子が見られた。



〈かるた大会の様子〉

4. まとめ

震災から12年がたち震災まちづくりが一段落し、徐々に震災後に生まれる子どもたちも増えている。今回のワークショップを通して、東日本大震災から得られた教訓をもとに災害を学んだ子どもたちはかなり敏感に災害について考え、学んだ教えについては大人たちが想像する以上に深く彼らに根付いているように感じられた。また、ワークショップで子どもたちがその絵を描いた理由を話してくれた様子から、子どもたちは大人が関心するほどに唐丹のまちの生き物や特徴などを的確に捉えており、まちをよく見ていることが感じられた。

まちを作っていくためには、自分のまちを客観的に捉え魅力や特色を言葉として紡ぎ出す機会を作ることが大切であると思う。そしてそれには、専門家が住民と同じフィールドで考えていくことが必要であると思う。今回のワークショップで、まちづくりを専門的に学ぶ私たちと地域住民である子どもたちが会話を通じながら一緒に唐丹のまちについて考えることができたことは、大変有意義な機会であったと思う。

まちづくり講演会では、家族間での会話が少なく防災意識が昔と比べ弱まっていることが指摘された。しかしながら今回のワークショップでも見受けられたように、子どもたちは大人とは異なる視点でまちを捉えている。東日本大震災で多くの子どもたちが大人を守った事はそのあらわれであろう。子どもと大人それぞれが自分のまちをどう見ているのか、考えを共有する時間を取ることができれば、双方の貴重な学びの場となると期待できよう。

実施日が運悪くコロナの流行のタイミングと被ってしまったことから、かるたワークショップの参加者は児童館の子ども数名と限られた人数となってしまったが、10月1日（唐丹の日）の公民館での成果物の展示や、12月の公民館のクリスマス会でワークショップの開催を通し、幅広い年齢の方とまちにつ

いて考えることができたと思う。今後も、まち全体で楽しく唐丹の未来を考える機会を提供できるものに昇華させていきたい。

5. 謝辞

今回ワークショップ実施にご協力いただいた唐丹児童館の皆様、ワークショップに参加して下さった児童館の子どもたち、講演会にてご講演をいただきました磯崎様、河東様、三日間に渡る取り組み各所においてご協力いただきました唐丹公民館の皆様には厚くお礼申し上げます。

今回はコロナの流行により少人数でのワークショップとなりましたが、子どもたちの貴重な意見を得ることができ、今後の唐丹のまちにおける課題や可能性を広げることができたことは、唐丹のまちづくりにおいて貴重な機会となったと思います。

引き続き、唐丹のまちづくりのため、今年度の取り組みを継続して行っていければと思っております。

ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。

北海道から離れた地域にアイヌ文化をひろめる

申請No. 12

文学部史学科3年（6名）

今回の社会連携活動において、私たち史学科有志団体は「北海道から離れた地域にアイヌ文化を広める」ことを目的に活動を進めた。具体的な活動の流れとしては、9月9日から12日の3泊4日で北海道を訪れ、その成果をパンフレットとして形にして、中高生に配布し、アイヌ文化への関心を計るアンケートをおこなうというものであった。

9月に北海道を訪れるまで、私たちはアイヌ文化について各々調べ、平取町立二風谷アイヌ文化博物館様（以下、博物館）と（株）平取町アイヌ文化振興公社様（以下、振興公社）にご協力いただき、北海道での体験を有意義なものにするため準備した。大まかな流れとしては、日程表の通りである。なお、博物館では学芸員の廣岡絵美様に、振興公社では木村美咲様、聞き取り調査では門別徳司様ともう一方にご協力いただいた。

実際北海道を訪れる予定通りにいかないことが多かったが、それ以上に二風谷に根づくアイヌ文化を直接肌で感じることができ、現地調査ならではの体験が出来たと考える。1日博物館体験では、アイヌ文化や博物館来館意識のアンケートを行ったり、当時行われていた「ゴールデンカムイ」の謎解きイベントに参加したり、1日中二風谷コタンで来場された方々と交流をした。謎解きイベントは周辺の萱野茂二風谷アイヌ資料館や平取町アイヌ工芸伝承館ウレシパなどに行きながら解くものであり、ウレシパではアットゥシ織の方からチナサンケについてお話を伺った。聞き取り調査では、アイヌの狩猟精神や二風谷のアイヌ民族に対する差別の歴史について直接お話しを伺うことができ、教科書などでは知り得ないことを現地に実際に足を運ぶことによって感じ取り、学ぶことが出来た。

このような経験を踏まえて、パンフレット制作をした。そのパンフレットを読んだ中高生の反応としては「私たちはまだアイヌ文化についての知識が少ないため、積極的にアイヌ文化について知ろうとすべき。」「アイヌの方が発信したいことを受け取るように意識的に取り組む」といったものがあり、私たちが目的として掲げた「北海道から離れた地域にアイヌ文化を広める」ことは微小ながらも達成できたと言える。

今回の活動を通して、アイヌ文化は今も生き続けている文化であるという再認識をすると同時に、アイヌ文化の振興活動が北海道以外の場所で伝えるには大々的な広告活動以外にも、まずアイヌ文化というものを「知る」という行為が一番重要なのではないかと考える。この活動以降も私たちが主体的に若い世代にアイヌ文化を「知る」機会を増やしていくことが、今回の活動でご協力いただいた博物館の方・振興公社の方及びアイヌ文化を広める活動をする二風谷の方への最大の恩返しになるのではないかと考える。

現地活動日程表	
9日	北海道到着、シト作り体験 博物館見学／チセにて口承文芸を聞く体験
10日	博物館お手伝い体験 萱野茂二風谷アイヌ資料館／平取町アイヌ工芸伝承館ウレシパ見学
11日	(株)平取町アイヌ文化振興公社スタッフの方への聞き取り調査、札幌駅に移動
12日	札幌駅情報センターminapa見学、北海道出発



図1 二風谷コタンの写真



図2 札幌駅情報センター「minapa」において

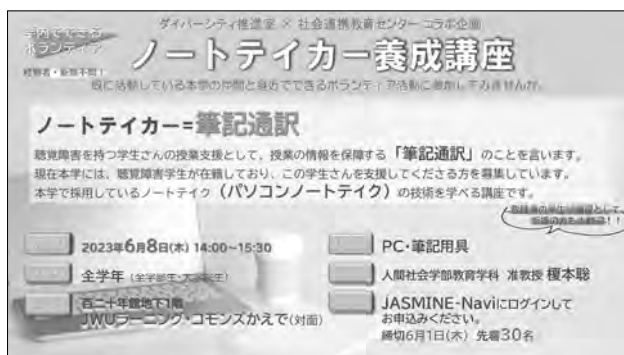
JWUチームボランティアについて

学生の社会貢献活動への意識醸成、理解促進を目指し、年度初めに「JWUチームキャンパスボランティア活動紹介week」と称し、学内でできるボランティア活動（ノートテイクボランティア、妊産婦・乳児救護所ボランティア、川崎市多摩区との連携事業への参加ボランティア）を紹介する講座を3回にわたり開催した。参加者はのべ147名であり、学生のボランティア活動における関心の高さがうかがえた。



これに引き続き、新規ノートテイクの獲得および、既存ノートテイクの養成に向けたノートテイク養成講座を年2回開催した。6月に開催した養成講座には、定員30名のうち27名の参加があった。第2回の養成講座では、講座の受講だけではなく、実際の運用につながるよう、講座終了後に先輩ノートテイクとの交流会を設け、様々なアドバイスや意見交換を行った。

昨年度から活動機会に課題のあった妊産婦・乳児救護所ボランティア活動については、1 dayボランティアの機会を1回設け、妊産婦・乳児救護所の運営に関わる住居学科平田ゼミの学生主導のもと、救護所の広報動画作成に携わった。この1 dayボランティアに携わった学生より、妊産婦・乳児救護所での光源の確保として、ペンライトを収集する活動が立案、実施された。継続した活動となるよう来年度への橋渡しが課題である。



学外へのボランティア学生派遣について

これまでコロナ禍のため、活発な活動が控えられてきたが、23年度には近隣自治体や社会福祉協議会の要請によるボランティア活動が増加し、様々な地域、企画に学生を派遣した。活動後の学生からのアンケート回答からも、自治体の方とのふれあいからの学びが多く充実した活動となった様子がうかがえた。学生に紹介するボランティア情報の選別や、情報の提供方法、フォローアップ体制の整備は随時見直しをして充実させていきたい。

【主な派遣先】

文京区（小学校での校外学習補助、地域イベントでの運営サポートなど）

豊島区（地域イベントでの運営サポート、高齢者向けスマホ講習会サポートなど）

調布市（福祉作業所補助スタッフ）

川崎市多摩区（地域イベントでの運営サポートなど）

地域連携報告

心理相談室活動報告

社会連携教育センター分室心理相談室長 堀江桂吾
人間社会学部心理学科准教授

心理相談室は、地域住民を対象とした心理相談サービスを提供し、地域住民のメンタルヘルス向上への貢献と、実践力のある臨床心理士・公認心理師の教育・養成を目指す2つの側面を備えている。西生田キャンパスからの移転に伴い、2021年5月に開室した。新型コロナウイルス感染状況を鑑み、手洗いや換気、パーティションの使用等感染対策下での対面相談を実施してきた。なお、2024年4月1日以降は、パーティションは廃止を予定している。

相談業務においては、申込み問合せ数は67件（うち受理面接21件）、総面接回数は722回であった（3月末時点）。バスの広告やホームページをきっかけとした問い合わせや、近隣の医療機関・教育機関からの紹介が続いている。

また、10月29日（日）には、日本女子大学人間社会学部心理学科主催・心理相談室共催セミナーを開催した。吉澤一弥先生（日本女子大学名誉教授）をお招きし、「子育て支援者を中心とした多職種協働のダイナミズム－「ストップ虐待・親支援のあり方検討会議」の経験から－」というテーマでご講演いただいた。昨年度までは遠隔テレビ会議システムを使用していたが、今年度から対面で実施した。59名の方が参加した。

そして、大学院生及び修了生の臨床実践及び研究成果の発表の場として、紀要第21巻を刊行した。同巻には、セミナー内容の報告も収録している。

心理相談事業（心理相談室）

室長 心理学科准教授 堀江桂吾

相談担当者 心理学科教授 青木みのり 塩崎尚美 川崎直樹

心理学科臨床専任助教 心理学科非常勤助手

人間社会研究科心理学専攻臨床心理学領域在学生 同研究生 嘱託相談員

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
相談件数	65	69	56	68	45	62	61	54	51	59	63	69	722

（3月31日現在）

文京区妊産婦・乳児救護所と文京避難所大学について

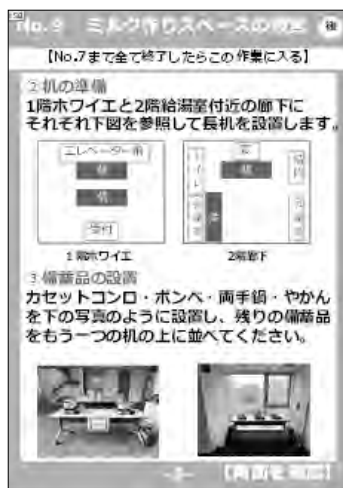
家政学部住居学科教授 平 田 京 子

文京区との協定に基づき、災害時には、妊産婦・乳児救護所が日本女子大学新泉山館に開設される。その運営体制の確立や、物品の準備等を進めることが喫緊の課題となっている。避難者である0歳の赤ちゃんとお母さん、妊婦の方々（文京区の想定では収容人数妊婦80人、母子80組 合計240人）を守る体制を確立するため、本学では、次のような研究・授業と連動した事前準備型の活動に注力しており、教職協働・学生との協働体制の構築を試みている。また地域の防災人材育成のため、文京避難所大学関連の活動を実施した。

2023年度には、下記の社会連携活動を行った。

1. 研究と連動した事前準備型の活動

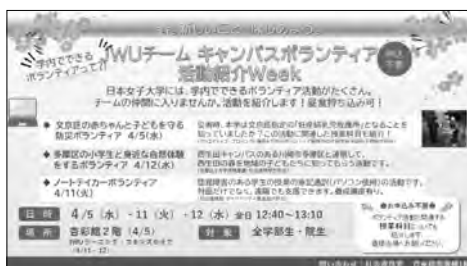
卒業論文「日本女子大学妊産婦・乳児救護所の開設・運営計画と開設時間短縮による運営者不足解消—開設前・後キットの開発とシミュレーションによる検証—」（住居学科 福江瑞、藤原未羽、山本彩夏）では、事務局と打ち合わせを重ねながら、開設者・避難者等の全体の流れを検証しつつ、救護所の開設キットの改良、さらに生活運営キットが新しく完成した。



卒論にて開発された日本女子大学妊産婦・乳児救護所生活運営キット（新規開発部分の抜粋）

2. ボランティアウィーク 新入生や在学生への学内ボランティア教育の周知活動

新学期の履修登録に間に合わせるべく、社会連携活動や社会連携認定制度、社会連携活動関連授業の紹介を行った。



JWUチームキャンパスボランティア活動紹介Week ちらし

3. 学内ボランティアによる妊産婦・乳児救護所動画撮影

学内ボランティアの活動として、妊産婦・乳児救護所の状況を解説し、妊産婦の対象者の事前の備えに活かしてもらうことを目標として、救護所やその中の生活の概要を動画として制作した。



2023年9月20日 動画撮影参加者（学生のみ）

4. 学内ボランティアによるペンライトボランティア

学内ボランティア活動として、JWU社会連携科目（全学学生対象、2年次以上）「地域・企業と未来を創るクリエイティブ・プロジェクト演習A」（担当：住居学科 平田京子）の授業で実際に提案された「家にある使っていないペンライトを寄付してもらい、救護所の照明に活かすこと」を目的としたペンライトボランティア活動を行った。

2023年初冬から住居学科平田研究室の3年生が中心となり、活動方針を立て、実際に寄付されたペンライトを照らす点灯式（於：ラーニングコモンズかえで）を2024年1月10日（水）昼休みと17:00に行った。ペンライトの寄贈数は周知不足などもあり少なかったが、数名のボランティアが名乗り出て、点灯式には複数の学生が参加してくれた。今後も、計画をより改良して、実施する見込みである。



ペンライトボランティア 寄付と点灯イベントのチラシ

5. 教職協働、学生との協働体制構築

JWU社会連携科目での学生リーダー育成、授業での学生主体型グループ演習

JWU社会連携科目（全学学生対象、2年次以上）「地域・企業と未来を創るクリエイティブ・プロジェクト演習A」（担当：住居学科 平田京子）の授業では、学生リーダーとしてのスキルを育成するほか、グループ演習の形で救護所運営計画を立案、文京区や大学事務局の前で7月にプレゼンテーションを行い、指導を受けた。実際にアイデアを採用してもらえることにつながり、学生の満足度も高かった。

6. 文京区との協働プロジェクト「文京避難所大学」2回開催

2019年度より実施している、文京区との協働プロジェクト「文京区防災士・防災リーダー全体会 文京避難所大学2023」において、地域の防災人材を育成する実践的なリーダー研修を2回実施した（2023年11月7日、2023年12月12日）。



文京避難所大学2023年度の様子

文京区体力・増進事業について

家政学部児童学科

准教授 杉 山 哲 司

准教授 澤 田 美砂子

文京区の委託事業である幼児の体力向上推進事業（本学との連携をとおして幼児の運動遊びの充実と運動意欲の向上を図る）について、2023年度の委託内容は、（１）園児の運動意欲や体力の向上につながる園環境の活用提案、（２）体力向上イベントの実施 であり、下記にその活動詳細について報告する。

（１）園児の運動意欲や体力の向上につながる園環境の活用提案

文京区立幼稚園の園庭や園舎、保有する遊具や教具等の園環境の特徴や園児の実態を踏まえ、2022年度～2023年度の２年間において、環境を生かした運動遊びの設定方法等、園児の運動意欲や体力の向上につながる園環境の活用方法を提案することを目的とし、2023年度は文京区立幼稚園全10園のうち5園（後楽幼稚園、根津幼稚園、明化幼稚園、柳町幼稚園、湯島幼稚園、）を中心に実地踏査および園教諭からのヒアリングを行った。杉山は後楽幼稚園、柳町幼稚園、湯島幼稚園、澤田は根津幼稚園、明化幼稚園において、園庭、園舎、固定遊具等を中心に記録し、園庭における子どもの遊びの様子などから各園環境の特徴についてまとめた。最終的には2022年度からの実地踏査およびヒアリングを経て得られた各園の状況、および文京区の幼児・児童の体力傾向をふまえ、各園環境の活用方法に関する提案書を作成し、実施園に対してそれぞれフィードバックを行った。

（２）体力向上イベントの実施

2024年3月16日に「クライミングにチャレンジしてみよう！」を本学第一体育館にて開催した。当日は、文京区内在住・在学の2024年度就学予定の幼児、および小学1、2年生あわせて16名の子どもたちが、保護者とともに参加した。講師は本学身体運動科目「クライミング」の非常勤講師・西谷善子先生に依頼した。また、スタッフとして本学身体運動科目非常勤講師1名および身体運動演習「クライミング」受講学生4名がサポートを行った。参加した子どもたちは、目標の場所まで登ったときの達成感や、登る道すじを自分で考えて体を動かすことの楽しさを感じ、保護者や参加している他の子どもたちとその気持ちを共有しているようであった。このイベントでの経験が、体を動かす遊びや様々なスポーツ種目に対する意欲の向上につながることを期待したい。

文京区連携活動報告

文京区より指定を受けている妊産婦・乳児救護所の運営について、JWU社会連携科目で開講されている「地域・企業と未来を創るクリエイティブ・プロジェクト演習A」（住居学科平田教授担当）にて継続して取り上げ、学生・教職員、文京区が三位一体となり検討を行っている。防災の観点からは、文京避難所大学への講師派遣も継続して実施し、区内の防災士の育成に努めている。また、健康・体力増進事業の推進についても、昨年に引き続き児童学科協力のもと実施した。

●2023年度 第1回区内大学地域連携担当者会議

1. 日時 2023年7月20日（木） 9時15分～10時15分
2. 場所 アカデミー文京 レクリエーションホール
3. 議題
 - ・区からの周知事項
 - ・大学からの周知事項
 - ・大学間における情報共有について
 - ・今年度の区内大学学長懇談会について
 - ・その他

●2023年度 第2回区内大学地域連携担当者会議

1. 日時 2024年1月18日（木） 9時15分～10時15分
2. 場所 アカデミー文京 レクリエーションホール
3. 議題
 - ・区からの事業協力要望及び情報提供等について
 - ・大学からの周知事項について
 - ・令和5年度区内大学学長懇談会の報告について
 - ・大学と区の連携実績について
 - ・新たな連携検討にあたっての意見交換について
 - ・その他

●2023年度 文京区内大学学長懇談会

1. 日時 2023年12月5日（火） 10時30分～13時
2. 場所 東京ドームホテル5階小宴会場
3. 次第
 - （1）開会挨拶（文京区長）
 - （2）報告事項 大学学長講演会実績及び区内大学と区との連携実績
 - （3）懇談・意見交換テーマ 『アフターコロナにおける大学の取組みについて』

●2023年度第1回文京区防災士・防災リーダー全体会 文京避難所大学2023

1. 日時 2023年11月7日（火） 18時～20時
2. 場所 文京区民センター3階3-A会議室
3. 議題 ワークショップ「避難所運営における課題検討について」
日本女子大学家政学部住居学科 教授 平田京子
日本女子大学名誉教授 石川 孝重

●2023年度第2回文京区防災士・防災リーダー全体会 文京避難所大学2023

1. 日時 2023年12月12日（火） 18時～20時
2. 場所 文京区民センター3階3-A会議室
3. 議題 ワークショップ「避難所運営における課題解決のための訓練検討」
日本女子大学家政学部住居学科 教授 平田京子
日本女子大学名誉教授 石川 孝重

●健康・体力増進事業 第3回体力向上イベント クライミングにチャレンジしてみよう

1. 日時 2024年3月16日（土）10時30分～12時
2. 場所 日本女子大学 目白キャンパス第1体育館
3. 対象 区内在住・在学の次年度就学予定の幼児及び小学1・2年生とその保護者1名（20組）



川崎市多摩区3大学連携事業について

家政学部児童学科

教授 請 川 滋 大

准教授 安 藤 朗 子

本事業は、川崎市多摩区にゆかりのある3大学（専修・明治・日本女子）の知的資源を活用し、大学と地域社会が連携して地域社会の様々な課題解決を図り、地域の活性化につなげ、文教都市としてふさわしい地域づくりを推進することを目指し、多摩区が各大学に委託事業として実施しているものです。

2023年度、本学は多摩区が提示するテーマの中の「たまっ子を区民みんなで育てるまちづくり」を選び、「身近にある森の自然体験ワークショップ」と題して、西生田キャンパスの水田記念公園において、地域の小学生と保護者を招いて自然体験ワークショップを行いました。

【本事業の目的】身近な自然や生き物に親しむことは、子どもの健全育成に大切なことですが、ICTがめざましく進んでいる現代社会においては、大人も子どもも自然と触れ合う機会が少なく、楽しみ方もわからないという問題が指摘されています。そこで、自然の楽しみ方や観察法等について、大学生や教員が学ぶとともに、たまっ子や保護者たちに伝え広める活動を行うことを目的としました。

【事業の内容と成果】まず、日本女子大学西生田キャンパスの水田記念公園にて、プロ・ナチュラリスト 佐々木洋氏を講師に招き、学生・教員が自然体験授業を受けました。その後、講師および本学教員の指導のもと学生が主体となって、地域の小学生の親子を水田記念公園に招いて自然体験ワークショップを実施しました。そして、学生と教員により自然体験ワークショップを振り返り、報告書を作成しました。また、身近な自然体験を広めるためのリーフレットを作成し、多摩区内で配布し、活動の成果を報告会で発表しました。具体的な活動スケジュールは、以下の通りです。

- 4/12（水） ボランティア学生募集のための事業説明会実施
- 5/11（木） キックオフミーティングの開催（活動内容やスケジュールなどの説明）
参加学生10名決定
- 7/25（火） 講師と教職員で水田記念公園の下見
- 9/17（日） 水田記念公園にて、学生と教職員が講師による自然体験授業を受講
- 10/29（日） 水田記念公園にて、学生と教職員、講師でワークショップ当日のルートや自然観察の教授法などの確認や準備
- 11/ 3（金・祝） 多摩区在住の小学生と保護者を招いての自然体験ワークショップ開催（参加親子7組）
- 12月～2月 学生3班に分かれ、リーフレット作成、活動報告の資料作成・発表会準備
- 3/18（月） 多摩区役所での報告会（参加学生3名、教員3名、職員2名）

参加者へのアンケート（回答者5組）では、「身近にたくさんの自然があることを知った」、「今後もこのような活動に参加したい」という声をほぼ全員の方からいただきました。学生からは、都市部でありながら自然豊かな多摩区にある森を有意義に使用する必要性を感じた等の意見が出されました。

参加教員：家政学部児童学科 請川滋大・安藤朗子、人間社会学部心理学科 麦谷綾子

川崎市多摩区連携活動報告

川崎市多摩区と明治大学・専修大学・本学の3大学は2005年より多摩区・3大学連携協定を締結しており、様々な取り組みを共催してきた。昨年度に引き続き有観客で開催された「多摩区3大学コンサート」には、昨年同様に本学公認サークルのマンドリンクラブが参加した。また、大学・地域連携事業においては、子育てプロジェクトチームから「たまっ子を区民みんなで育てるまちづくり」をテーマに選択した、「身近にある森の自然体験ワークショップ」を提案し採択された。西生田キャンパス内の森を会場に、近隣の親子を招待したワークショップを実施した。

●2023年度 第1回多摩区・3大学連携協議会

- 1.日時 2023年4月28日（金） 14時～14時57分
- 2.場所 多摩区役所6階防災事務局室
- 3.議題
 - ・令和5年度大学・地域連携事業の報告について
 - ・令和5年度インターンシップについて
 - ・多摩区3大学コンサートについて
 - ・地域向け情報誌（たまなびNews）の発行について
 - ・大学生の地域参加促進事業（たまなびプログラム）について
 - ・20周年記念事業（令和7年度）
 - ・令和5年度のスケジュールについて
 - ・各大学からの報告事項

●2023年度 第2回多摩区・3大学連携協議会

- 1.日時 2023年10月6日（金） 9時～10時
- 2.場所 多摩区役所6階多摩防災センター事務局室 及びZoom ミーティング
- 3.議題
 - ・令和5年度インターンシップ実施結果報告
 - ・令和5年度大学生の地域参加促進事業（たまなび）について
 - ・協議会20周年記念（令和7年度）の実施について
 - ・令和6年度大学・地域連携事業の募集について
 - ・令和5年度大学・地域連携事業中間報告について
 - ・令和5年度地域向け情報誌（たまなび News）の発行について
 - ・令和5年度多摩区3大学コンサートについて
 - ・令和5年度のスケジュールについて
 - ・各大学からの報告事項

●2023年度 第3回多摩区・3大学連携協議会

- 1.日時 2024年3月1日（金）10時～
- 2.場所 多摩区役所6階多摩防災センター事務局室 及びZoom ミーティング
- 3.議題
 - ・第100回箱根駅伝出場応援の取り組み結果について
 - ・令和5年度大学・地域連携事業報告会について
 - ・令和6年度大学・地域連携事業について

- ・令和5年度大学生の地域参加促進事業（たまなび）について
- ・令和6年度大学生の地域参加促進事業（たまなび）実施について
- ・生田緑地エントランススポットについて
- ・協議会20周年記念事業について
- ・令和6年度多摩区3大学コンサートの開催日について
- ・令和6年度のスケジュールについて
- ・各大学からの報告事項

●多摩区3大学コンサート

- 1.日時 2023年11月11日（土）14時開演
- 2.場所 多摩市民館
- 3.参加 日本女子大学公認サークル マンドリンクラブ



●2023年度大学・地域連携事業

「身近にある森の自然体験ワークショップ」

多摩区の自然の素晴らしさを広く発信することを目的に、日本女子大学西生田キャンパスの水田記念公園にて地域の小学生の親子を招いて自然体験ワークショップを実施。

- 1.日時 2023年9月17日（日） 事前準備
10月29日（日） 事前準備
11月3日（金・祝） ワークショップ
2024年3月18日（月） 事後報告会
- 2.場所 日本女子大学西生田キャンパス 水田記念公園
- 3.参加 家政学部児童学科 教授 請川滋大・准教授 安藤朗子
人間社会学部心理学科 准教授 麦谷綾子
JWUチームキャンパスボランティア有志学生



板橋区立中央図書館との連携事業

「親子読み聞かせ講座」と「図書館サポーター講座」

家政学部児童学科准教授 今田由香

板橋区教育委員会と連携し、読書活動の推進に関わる2つの活動に講師として関わることができた。2023年10月5日（木）に板橋区立中央図書館で開催された「楽しく学ぼう！親子読み聞かせ講座」では、板橋区在住・在勤・在学中の0歳から3歳までの子どもたちとご家族に、乳児期から楽しめる絵本の特徴や選び方を紹介し、海外の絵本も多く所蔵する板橋区立中央図書館の活用方法についてもお伝えした。その後、ゼミ生9名も参加させていただき、イエラ・マリ作『あかいふうせん』（ほるぷ出版）などを楽しんだ。

『あかいふうせん』は「サイレント・ブックス」、つまり文字が書かれていない絵本である。事前準備のなかで、「講座に参加する方は、赤ちゃん絵本の定番にはもう親しんでいるのではないか」という意見が学生から出され、乳児期にはあまり手に取らないであろう、サイレント・ブックの名作を紹介することにした。結果としてはよい選択となり、親密で充実した時間を過ごせたように思う。文字のない絵本はページをめくるだけで変化が生まれるように作られており、読者が自由に言葉を加えて自分なりに楽しむことができる。保護者も学生たちも、赤ちゃんが声をあげ、熱心に絵本に視線を向け続ける姿に喜び、驚いていた。

もう1つの活動は、板橋区の公立図書館や学校等で活躍する図書館サポーターのみなさんを対象とした講座で、「物語絵本を読み解く」というテーマで、2024年2月27日（火）と28日（水）の2日間にわたって開催された。

絵本において物語は、絵と文字だけではなく、本の大きさや形、絵や文字の配置など、本を構成する多様な要素の組み合わせ方によっても語られている。このことを理解した上で、絵本を読み解くことの面白さを実感していただきたいと願って、1日目はユリー・シュルヴィッツ作『よあけ』（瀬田貞二訳、福音館書店）を、2日目はショーン・タン作『ロスト・シング』（岸本佐知子訳、河出書房新社）を読み解いた。終了後に実施されたアンケートでは、「絵本の新しい見方を知り精読する経験もできて良かった」「絵本を見る時の気持ちが変わった。こういう学問があったのかと新しい世界を見ることができた」等の感想をいただいた。

2023年度も、赤ちゃん、学生たち、大人まで、幅広い年齢のみなさんと絵本の面白さを分かち合える機会をいただけたことに感謝している。



板橋区立中央図書館との連携事業

「みんなで歌おう！わらべ歌」「歌って遊ぼう！わらべ歌」

家政学部児童学科教授 根津 知佳子

本学と包括連携協定を締結している板橋区教育委員会との連携事業の一環として、2023年9月10日（日）に「みんなで歌おう！わらべ歌」、12月17日（日）に「歌って遊ぼう！わらべ歌」を実施した。2つの活動は、板橋区立中央図書館の姉妹図書館であるイタリアボローニャ市立サラボルサ児童図書館の「わらべ歌の収集プロジェクト：POLPA（ポルパ）」の連携事業として位置づけられている。「POLPA」とは、「P（POESIA）：詩」「O（ORALE）：口伝えの」「L（LUDICA）：遊戯的」「P（PUERILE）：子どもの」「A（AUTENTICA）：本物の、正真正銘」の頭文字をとったものであり、2023年2月に実施した第1回の活動も含めて、のべ23名の子どもが参加した。

いずれの活動も「図書館ホールに集合し、みんなの広場で身体を使って遊び、その後ホールでわらべ歌を収集する」という流れとした。「わらべ歌」の分類については、小泉文夫（1969）の10分類に依拠したが、参加者の発言や連携事業にかかわるスタッフとの意見交流を経て、第3回目のテーマを「歌って遊ぼう！わらべ歌」に修正した。

参加した大学院生2名がデータの収集・編集にあたり、板橋区立中央図書館を介して35件の音声データをボローニャ市立サラボルサ児童図書館に提出した。そのうち『1ちゃん』『2ちゃん』『大波小波』『ゆびきりげんまん』『だるまさんがころんだ』『なべなべそこぬけ』『どらえもんのかきうた』『へのもへじ』の8曲がアーカイブで公開された（2024年3月31日現在）。

2023年12月27日（水）、サラボルサ児童図書館において、ニコレッタ・グラマンティエーリ氏（児童図書館総責任者、司書）とPOLPAプロジェクトを担当しているクワント・バスタ（QB Quanto Basta）の3名と意見交流を行った。その結果、両国の子ども文化の相違を確認することができただけでなく、この連携事業の独自性を確認することができた。

2024年3月1日（金）から7日（木）に開催された「いたばし子ども絵本展」において「わらべうた収集プロジェクト」の展示コーナーを設置し、この連携事業について報告した。大学と図書館との協働を通して「わらべ歌の概念の捉え直し」という研究的成果を得ることができただけでなく、「子ども文化の拠点創出の可能性」というこの連携事業の可能性を見出すことができた。



サラボルサ児童図書館
「POLPA」プロジェクト
(イタリア語・わらべ歌掲載あり)

板橋区教育委員会との連携事業「中台延命寺史料調査」

文学部史学科教授 藤井雅子

本学は2014年4月に板橋区教育委員会と「学術研究の発展と教育施策の充実のため、相互の協力により包括的な事業連携を実施する」協定を締結しています。その協定を基に、今年度、板橋区と本学との社会連携による資料調査事業を実施いたしました。

この事業が実現した背景には、板橋区教育委員会に本学卒業生の神子美涼氏が学芸員として板橋区の文化財管理・保存に携わっていたことが挙げられます。板橋区に所在する中台延命寺には、江戸時代後期に奉納された『大般若経』全600巻が所蔵されていましたが、大部な史料であるために、調査の人員を確保できず、史料調査が進まない状況とのことでした。そこで本学の学生にボランティアとして史料調査に参加してもらい、史料目録を作成することを目的とした事業を行うことになりました。

2023年5月12日（金）に中台延命寺において中台延命寺住職大塚龍雅氏、板橋区教育委員会生涯学習課文化財係の学芸員吉田政博氏、同神子氏、本学側の担当者として文学部史学科藤井雅子、社会連携室上村真司が史料状態の確認および調査実施に向けての打ち合わせを行いました。その後も協議を重ね、10月12日（木）に本学百二十年館JWUラーニング・コモンズかえでにおいて、「中台延命寺所蔵資料調査および調書作成業務」事前レクチャーを実施いたしました。参加学生は37名におよび、中台延命寺住職から講和と大般若経転読をご披露いただいた後、神子氏より調査内容や資料の取り扱い上の注意事項について解説がありました。

調査は、10月27日から3月21日の間に17回実施され、学生40名（史学科、児童学科、被服学科、日本文学科、社会福祉学科、教育学科、文化学科、数物情報科学科、化学生命科学科）、指導役として神子氏、藤井、史学科助教佐藤亜莉華、同院生姜錫正、卒業生松島彩華が参加いたしました。作業内容としては、①『大般若経』一卷毎に書誌情報や内容情報の調書を取る、②Excelに調書内容を入力する、③史料の撮影、④施主の所在地域を調べて地図にマークする、を行いました。これらすべてに本学学生がボランティアとして携わり、手際よく丁寧に作業が進められました。

調査の結果、中台延命寺所蔵の『大般若経』は、19世紀半ばごろに奉納された鉄眼版（黄檗版）の大般若経であり、施主（奉納者）は延命寺近隣の現板橋区の庶民（農民）を中心としながらも、現豊島区・文京区（湯島）・練馬区・千代田区（麹町）・埼玉県などにも広く点在していることがわかりました。つまり江戸時代末期に延命寺を中心とした庶民の仏教信仰やその実態が解明されたわけです。なお今回の調査内容は指定目録としてまとめられ、2025年春に板橋区文化財指定のための資料になる予定です。

最後になりましたが、本事業を中心的に運営してくださった神子美涼氏に感謝申し上げます。また本学学生に貴重な寺宝の調査をご許可いただいた中台延命寺住職の大塚龍雅氏にも厚く御礼申し上げます。



中台延命寺での調査の様子



中台延命寺大般若経奉納者分布図

(出典 国土地理院発行 1 : 10000地形図『池袋』『新宿』『練馬』『中野』『石神井』『吉祥寺』(昭和31年修正測量))

北海道日高管内7町・日高振興局・日高町村会との 包括連携について

2021年度に本学と北海道日高振興局、及び当振興局内の7町（日高町、平取町、新冠町、新ひだか町、浦河町、様似町、えりも町）において包括協定を締結してから、3年目を迎えた今年度は、シンポジウムなど継続して新たな取り組みが実施された。

授業	
家政学部 被服学科 森理恵	被服学科「民族服飾論」 北海道平取町とオンラインでつなぎ、博物館見学やアイヌ文化に関わる説明をしていただく。 5月8日（月）5限 平取町立二風谷アイヌ文化博物館 学芸員 廣岡絵美様
日高管内訪問	
家政学部 児童学科 澤田美砂子 学生7名	8月30日（水）～8月31日（木） 運動遊びイベント開催 ・えりも町光の園幼稚園 ・様似町立幼児センター
家政学部 住居学科 葉袋奈美子 学生3名	9月5日（火）～9月6日（水） 子ども向けワークショップ開催 ・貫気別生活館（平取町）
家政学部 児童学科 岡本吉生 学生17名	9月8日（金）～9月11日（月） ・浦河町総合文化会館「アイヌの文化や暮らし」 ・浦河町大黒座「映画：大地よ アイヌとして生きる」 ・浦河町乗馬公園（浦河町の町民乗馬振興の取組みについて） ・浦河町役場表敬訪問 ・平取町立二風谷アイヌ文化博物館
学科による企画	
食物学科 藤井恵子	札幌センチュリーロイヤルホテル「おいしいとんがりロードフェア」 期間：6月1日（木）～6月30日（金） 場所：札幌センチュリーロイヤルホテル 内容：前年度に浦河町の名産である夏いちごを研究し、提案したメニューが、実際にメニュー提供された。 北海道フェアin 代々木 日時：9月30日（土）～10月1日（日）11時～16時 場所：代々木公園 内容：前年度提案メニューの一つである夏いちごドレッシングが商品化され、販売された。当イベントには学生が浦河町のブースにボランティアで参加し、町のPRを行った。
史学科 藤井雅子	シンポジウム「アイヌ文化とその伝承」 日時：10月21日（土）13時～16時 場所：日本女子大学目白キャンパス 成瀬記念講堂 講師：平取町立二風谷アイヌ文化博物館 学芸員 廣岡絵美様 株式会社平取町アイヌ文化振興公社 木村梨乃様
北海道日高町村議会議長会 表敬訪問	
	日時：11月30日（木）10時～11時 場所：日本女子大学目白キャンパス 百年館会議室

被服学科科目「民族服飾論」平取町連携オンライン授業

家政学部被服学科教授 森 理 恵

2023年度の被服学科選択科目「民族服飾論」（開講年次1年次）の第4週（5月8日（月）5限）において、北海道平取町との連携によりオンライン授業をおこなった。内容は次のとおりである。なお受講生には、連携先より事前学習の資料を頂戴し、LMSを通して配布した。

5月8日（月）5限 受講生38名

- 1 授業担当者（森）より概要説明
- 2 平取町立二風谷アイヌ文化博物館見学
案内・解説：同館学芸員 廣岡絵美様
- 3 講演「北海道のアイヌの歴史と文化 ～平取を中心に～」
平取町立二風谷アイヌ文化博物館学芸員 廣岡絵美様

授業終了後は学生よりLMSを通してリアクションペーパーを回収し、質問については廣岡様より文書で回答いただき、学生と共有した。学生からは貴重な見学ができた、貴重なレクチャーを聞いた、引き続きアイヌ文化について関心を持ち学んでいきたい、などの肯定的な意見が寄せられた。

昨年度、初めての試みとして被服学科科目「民族服飾論」にて平取町との連携授業をおこなったが、大変好評であったため、今年度も廣岡様にご協力をお願いした。引き続き同様の取り組みができるとうい考える。

日本女子大学文学部学術交流企画「アイヌ文化とその伝承」について

文学部史学科教授 藤井 雅子

本学は、2021年に北海道日高管内7町（日高町・平取町・新冠町・新ひだか町・浦河町・様似町・えりも町）、日高町村会及び北海道日高振興局と「相互協力に関する協定書」の締結を行い、以後、地域社会、研究、教育、産業の振興に貢献するために連携を進めてきました。そこで今年度、史学科では平取町立アイヌ文化博物館（以下、アイヌ文化博物館）と社会連携を図り、アイヌの文化や歴史の理解を深め、現在のアイヌを取り巻く課題について考えるためにシンポジウムを行いました。なお本シンポジウムは、主催は本学文学部で文学部学術企画として行いましたが、共催として日本女子大学社会連携教育センター、協力・講師として平取町立二風谷アイヌ文化博物館の連携企画といたしました。

2023年10月21日（土）、本学成瀬記念講堂において、「アイヌ文化とその伝承」というテーマでシンポジウムを開催いたしました。まず佐藤和哉学部長より開会のご挨拶をいただき、「地域における博物館の役割—二風谷アイヌ文化博物館を例に一」という題目でアイヌ文化博物館学芸員の廣岡絵美氏にアイヌ文化博物館の展示動画とともに、博物館の目的や特徴について御講演いただきました。次に平取町アイヌ文化振興公社の木村梨乃氏からアイヌ文化である口承文芸をご披露いただきましたが、関東ではほとんど聞くことが出来ない力強くかつ優美なアイヌ語の歌声に聴衆は酔いしれました。最後に、「アイヌ文化の伝承とその課題」をテーマとして、廣岡絵美氏、木村梨乃氏、本学文学部史学科の教員（古川元也、差波亜紀子、吉村雅美、藤井雅子）、史学科学部生6名が登壇してシンポジウムを行いました。討論では会場参加者からもアンケートや質問を募り、アイヌ文化の継承が抱える課題や、継承のための試みなどについて活発な議論が行われました。

このシンポジウムには学外者10名を含む150名に上る参加者があり、アンケートにはこのような貴重な機会に対する好意的な意見が多く寄せられました。そのため今後も本学では平取町立アイヌ文化博物館の所在する北海道日高管内と社会連携を進め、アイヌ文化を理解するための企画を継続して参りたいと考えています。



木村梨乃氏による口承文芸披露の様子



シンポジウムの様子

北区社会福祉協議会との連携事業「学習支援教室講師派遣/心理ケア訪問相談会」活動報告

人間社会学部心理学科准教授 堀江桂吾

1. 学習支援教室合同研修会

心理ケア研修「子供とのかかわり方研修会」 講師：人間社会学部教育学科 土上智子特任教授

2023年12月4日（月）13：00～15：00 岸町ふれあい館 第5集会室

9教室から20名が参加。学習支援に悩むボランティアスタッフが多いことから、発達障害を持つ児童や、日本語指導が必要な児童への対応について講義。その後、質疑応答を実施した。

2. 訪問相談会

第1回 田端学習支援教室 講師：人間社会学部心理学科 川崎直樹教授

2024年1月17日（水）18：30～20：30

ボランティアスタッフ6名と社会福祉協議会職員1名が参加した。事前に、学習支援教室に通うADHDのお子さんに対する対応について相談したいという情報あり。具体的には、対面授業時における配慮事項や、オンライン学習を行う際の配慮事項、ADHDの特性のあるお子さんに有効な教材などの質問があった。学習教室開催時間に訪問。教室の様子を見た後、教室終了後にコアメンバーに集まっていたいただき、実際の教室を見ての感想と、今回のメインテーマになっているADHDの特性のあるお子さんへの対応についてディスカッションを行った。

第2回 東十条教室 講師：人間社会学部心理学科 青木みのり教授

2024年1月31日（水）18：00～20：00

ボランティアスタッフ18名と社会福祉協議会職員1名が参加した。事前に心理ケア的な観点からの環境整備（椅子やテーブルの配置など）に関する質問があった。学習教室開催時間に訪問。教室の様子を見た後、教室終了後に講師より、「ネガティブメッセージかポジティブメッセージかでも座り方は違い、横並びだったとしても相手の顔を見ながら関わることもできるため、本日拝見した感じでは問題ないと思う」とアドバイス。その後、参加人数が多かったことからグループディスカッションは難しいと判断し、メンバー全員から感想をいただき、適宜講師からコメントした。

高知県高岡郡梶原町との包括連携について

4月13日（木）、かねてより協議を続けていた西日本地域では初となる高知県高岡郡梶原町と、本学にて相互協力による協定締結式を行った。他の連携地域同様に、相互のもつ人的資源、物的資源、知的資源を相互に活用することにより、地域社会、研究、教育、産業の振興に貢献することを目的とした連携となる。夏には、現地に赴き、梶原町にて協定締結イベントを行った。また9月には、現地にて梶原高校の生徒に向けたワークショップが実施され、高大連携の実現に至った。（国際文化学科木村教授担当）同校の生徒が修学旅行で本学を訪問した際には、入試説明会やキャンパスツアーを実施、目白祭では、梶原町の広報活動を行うなど、本格的な連携活動が始動した。



産官学連携報告

2023年度 AI・データサイエンス、ICTに関する社会連携活動

理学部数物情報科学科教授 長谷川 治 久

1. はじめに

人工知能（AI）、データサイエンス、ICTの発展と社会への普及はめざましく、日進月歩の様相を示している。特にこの1年ほどの間に、生成AIを利用したサービスが登場し、瞬く間に生活、学修、産業の場に普及しつつある。社会ではこれらの活用が重要な課題となり、さまざまなアプリケーションが試行されている。また、データサイエンスやICTと組合わせてサービスに応用する例も増えている。このような背景の中で学修する学生には情報科学から発する技術的な変革を意識しながら専門性を磨いていくことが必須と言える。これに対応すべく、今年度は下記の活動を実施した。

2. JWU社会連携科目の取り組み

昨年度より、JWU社会連携科目として以下の3つの科目を開講している。

「社会におけるICT、データサイエンス活用A」

「社会におけるICT、データサイエンス活用B」

「地域・企業と未来を創るクリエイティブ・プロジェクト演習C」

これらの科目では、企業と連携しながら、オープンデータやGISを用いて社会課題や市場動向を分析し、アプリケーションの提供を考えるPBLを行っている。今年度も株式会社ラック、NTTアドバンステクノロジー株式会社と連携して実施した。

3. Project PLATEAU ブートキャンプ

社会連携教育センターの活動の一環として、8月18～20日に「Project PLATEAU ブートキャンプ for Women's University Students 2023」を、本学と「女子大学生 ICT駆動ソーシャルイノベーションコンソーシアム（WUSIC）」の共催で実施した。本イベントは、国土交通省が主導する3D都市モデル・オープンデータであるPLATEAUを活用し、地域課題の解決やスマートシティ・都市DXに繋がるアイデアをチームでまとめ、発表するアイデアソンである。国土交通省、角川アスキー総合研究所をはじめ多くの企業からメンターや講師としてご協力をいただいた。ハイブリッド形式で開催し、3日目はJWUラーニング・コモンズかえでで実施した。全参加者数は、46名であった。本学からも積極的に参加があり、31名が参加した。また、最優秀賞と審査員特別賞を本学学生が受賞した。これらの成果は本学の社会連携教育が背景にあるのではないかと感じている。

4. むすび

今年度はJWU社会連携科目によりAI、データサイエンス、ICTの社会への活用について正課科目を提供するとともに、より実際的な応用に繋げるための課外イベントを実施し、効果的な学修機会を提供することができた。ちなみに、AI、データサイエンス、ICTの技術的側面は、基礎科目情報処理の「基礎情報処理」「AI入門」「データサイエンス入門」「ICT活用Ⅰ～Ⅵ」を通じて学修する機会が全学に提供されている。これらの科目や活動を通じて本学の学生はAI・データサイエンス、ICTについて、立体的で効果的な学びを実現できる環境を享受していると言える。

GIS Geographic Information System

PBL Project Based Learning

日本総合住生活株式会社との産学連携について

連携推進プロジェクトチーム 定行 まり子
家政学部住居学科教授

本学と日本総合住生活株式会社（以下「JS」という）は、2020年8月13日（木）に産学連携による寄附授業の協定について締結式を執り行い、2023年度は2021年度より実施してきた寄附授業の集大成の年であり、正に全学的で理想的な授業形態を実現するに至った。また、「住まい・団地・まちづくり」論文・制作賞も開催され、実績を積み重ね、今後に繋がることが期待された。

1. 寄附授業

2023年度の寄附授業は、学部の2年次から4年次と大学院生を対象に共同授業で進めた。学生と企業が様々な社会的課題を効果的に解決すべく、メインテーマを「これからの住まい方、団地のあり方、地域での暮らし方」とし、団地やまちづくりを理解するための各分野の専門家による講義、グループワーク、映像視聴等を通じ、団地建設の歴史や取り巻く環境、団地における施策などを学んだ上で、未来を見据えたこれからの住まい方や団地のあり方、ライフスタイル、ワークスタイルについて考察するワークショップを実施した。また、フィールドワークとして、団地見学会を自由参加で行った。

2023年度寄附授業の実施概要「テーマ」講師 等
講義1 (1)「UR賃貸住宅概要」(2)「UR賃貸住宅における団地再生等」 講師：(1) JS経営企画部企画課長 寺島宗利氏 (2) JS経営企画部UR事業連携担当部長 西村英一郎氏
団地見学 「ヌーヴェル赤羽台」(オンライン)
講義2 「団地の歴史」講師：株式会社団地研究所 井関和朗氏
講義3 「団地の成熟」講師：(株)山設計工房取締役相談役 山田正司氏
講義4 「『戦後史』のなかの住宅団地開発」 講師：JWU人間社会学部現代社会学科准教授 上田誠二氏
講義5 「高齢者と団地」講師：東京通信大学人間福祉学部人間福祉学科准教授 大塚順子氏
講義6 「多文化共生と団地」講師：朝日新聞社国際発信部 大島隆氏
講義7 「団地とコミュニティマネジメント」講師：HITOTOWA INC. 佐藤まどか氏
講義8 「SDGsの視点から見た団地内の建築・保育環境」 講師：JWU家政学部児童学科専任講師 浅野由子氏
講義9 (1)「食を通じた団地の利活用」(2)「DXBX施策紹介」 講師：(1) JS執行役員(住生活事業担当) 尾神充倫氏 (2) JSDXB戦略推進部DXBX企画第1課長 景野昌樹氏、同課員 日向夏実氏
講義10 「子どもと団地」講師：JWU家政学部住居学科教授 定行まり子氏
講義11 特別講義「東京圏のまちの成立と団地、そして今、そしてこれからの団地」 講師：JS特別顧問 石渡廣一氏 グループワーク・プレゼンテーション： テーマ「これからの住まい方、団地のあり方、地域での暮らし方」
団地見学会 (自由参加)
(1) ヌーヴェル赤羽台団地 (東京都北区)
(2) スクエアJS、田島団地及び団地キッチン (埼玉県さいたま市桜区)

2. JS「住まい・団地・まちづくり」論文・制作賞

JSの寄附のもとJS「住まい・団地・まちづくり」論文・制作賞と題し、本学学生の優れた研究成果を褒賞する授与式を2月29日に執り行った。学部学科を超え25名からの応募があった。JSからは石渡廣一特別顧問をはじめ、寄附授業担当社員3名、本学からは今市涼子理事長と篠原聡子学長に代わり金沢創

副学長が審査を担当し、最優秀賞、産学連携賞、社会連携賞の3賞をはじめ、特別賞、優秀賞、奨励賞を決定した。石渡特別顧問から、投稿論文全般について、高い評価があり、学生の将来に対する期待が述べられた。JSより次年度以降も本賞の継続が示唆された。

3. 「JS寄付授業の報告書」作成

2023年12月25日にJS石渡廣一特別顧問と定行まり子教授の対談を設定し、2020年のJSと本学の契約締結から2023年度の寄付授業までの総括を行い、2024年3月28日に、JS論文・制作賞の結果及び授与式の概要も含めた報告書をJSに提出した。本報告書には、総括のみならず、授業配布資料や学生・講師のリアクションを掲載するなど、今後にも生かせる資料として活用される事を期待し、JS担当者に校正をお願いして完成させた。



株式会社読売広告社との産学連携について

連携推進プロジェクトチーム 中西裕二
国際文化学部国際文化学科教授

2023年度は、読売広告社との産学連携協定に基づく寄附講座を9月4日（月）～9月7日（木）に実施した。本年度は、埼玉県秩父市にもご協力をいただき、秩父市の地域活性化、観光活性化を目的に、秩父市を舞台としたWeb上の縦スクロール漫画（通称「Webtoon」）のシナリオを作成する授業を行った。授業期間の9月5日（火）は、履修者が秩父市役所に集合し、秩父市観光課より秩父市の地域課題、観光についてガイダンスを受けた後、学生はグループに分かれ秩父市のフィールドワークを行った。それをもとに、履修者は6グループに分かれ、それぞれテーマが割り当てられ、ワークショップ形式でマンガのシナリオ作りを行った。9月7日の最終日には、秩父市役所の観光課の職員も参加した中で、各グループのプレゼンテーションが行われた。なお、本プロジェクトに西武鉄道が強い関心を示し、優れた作品なら西武鉄道内で使用したい申し出があった。そのため、最優秀シナリオを元に読売広告社が縦スクロール漫画を作成し、2024年3月より、マンガのポスターが西武線の駅に張り出され、また、2024年4月まで、西武線内のモニターにおいてマンガの広報、学生のメイキング映像が放映された。なお、このプレスリリースは2024年2月14日に秩父市役所での秩父市長の定例会見の席で行われ、その模様は新聞やWeb記事として取り上げられた。

「株式会社クボタ筑波工場におけるメニュー開発について」

家政学部食物学科教授 松 月 弘 恵

食物学科は2022年度に（株）クボタ筑波工場と「メニュー開発契約」を締結した。当該工場は同社の最大規模の施設であり、健康経営に関して先進的取り組みを展開し、社員食堂はスマートミールの三つ星認証を得ている。食経営管理学研究室では、その健康な食事の普及啓発イベントである「日本女子大Week」において、筑波工場のスマートミールの愛称である「つくメシ」のメニュー提案と受容度調査を行っている。

2023年度は第3弾イベントを4月17～21日（1日170食）、第5弾を9月18～22日（160食）に開催した。それらは連日短時間で完売し、味の評価もそれぞれのメニューに対して、90%以上の社員から「おいしい」と回答を得た。尚、第4弾は同一メニューをアンコール企画として再販し完売した。これらのアンケート結果と勤労課から得た食数をデータ分析して、月に1回オンライン会議を開催し、学生が勤労課、健康管理室と調理担当の給食会社のスタッフに対して報告し、次回の企画へと繋げた。

しかし、これらは健康な食事であっても、栄養の説明だけでは社員の購買行動には結び付きにくく、おいしさだけでなく、健康な食事の意義を伝える情報も必要である。しかしSDGsを推進する当該工場では紙媒体による広報は難しいため、健康や食事に関する30秒のショート動画を24本作成して、社員の目に触れやすいモニターや、社員限定のポータルサイトで放映した。これらの取り組みにより社員の方からの「レシピを教えて欲しい」とう要望が挙がり、「つくメシレシピブック 2023年」を作成し、希望者には健康管理室を通してデジタル配信した。

さらに、社員の昼食実態と健康な食事に対する意識を把握する目的で、臨床・栄養教育研究室（亀山詞子講師）との協同で「みんなの昼食と健康に関する調査 2023年」を実施した。その結果と「つくメシ」の販売実績を安全衛生委員会において、松月が「健康経営と食環境整備」として報告し、「つくメシ」推進の大きな後ろ盾をえることができた。これらの実績が評価され2024年度からは「技能五輪選手の栄養サポート」も依頼を受け、基礎栄養学・ゲノム医科学研究室（佐藤憲子教授）も加えて本学の連携体制を強化することとなった。

JWU子育てサイエンス・ラボ／子育てサイエンス・カフェ

JWU子育てサイエンス・ラボ活動報告

子育てプロジェクトチーム 麦谷綾子
人間社会学部心理学科准教授

JWU子育てサイエンス・ラボは、子育てに関連する種々の研究とその交流のための豊かな土壌を学内に育み、その成果を地域や社会に向けて迅速に発信・還元することを目指して、2021年度に社会連携教育センター内に設立された。活動を始めて3年目となる2023年度は、多様な学科から講演者を招いて計5回の「子育てサイエンス・カフェ」を開催した（下表参照）。今年度は学外からの参加のしやすさを確保するために、すべての講演がオンライン形式で実施され、いずれの回も多数の参加者が集まり活発な意見交換が行われた。

情報発信の側面では、ラボ設立当初からメールマガジンとニュースレター〈ゆりのき〉を定期的に発刊している。メールマガジンでは、子育てに関する情報をわかりやすい言葉で伝える「子育てtopic」や、「子育てサイエンス・カフェ」を含めた各種のイベント告知等を行っている。ニュースレター〈ゆりのき〉は、「子育てサイエンス・カフェ」の開催報告や、子育てに関係する卒業・修士論文の紹介を中心に紙面を構成している。学内から寄稿を募り、2023年度はメールマガジンを9回、〈ゆりのき〉を6回、発刊することができた。さらに12月には、〈ゆりのき〉のNo. 1～13をアーカイブ化し、各所に冊子体として配布した。

また、学内ラボメンバーの研究室に在籍している大学院生を主体とした子どもの発達に関する調査研究に、延べ130組以上の「ラボ協力会員」の親子に参加いただいた。この研究成果は、複数の学会発表および4編の修士論文として結実し、学生教育の面でもラボの活動の意義が示された（調査の詳細は3月18日発行の「ゆりのきNo.15」に掲載）。

3月には、「子育てサイエンス・カフェ」での講演やメールマガジンおよび〈ゆりのき〉への寄稿に応じてくださった研究者を招いて、初めての学内交流会を対面で開催することができた。今後も学内外との交流を深めながら、持続可能な形でより一層取り組みを活発化させたい。

開催日	2023年度「子育てサイエンス・カフェ」発表タイトル	発表者
6月17日	より良い子どもの遊び環境の実現に向けて －震災後の福島の子どもの遊び環境回復を事例に考える－	佐藤 海帆 (家政経済学科)
7月29日	弱虫は本当にダメか？：アタッチメントの理論から考える	岡本 吉生 (児童学科)
9月30日	クライシス（災害・パンデミック）から 子どもの日常生活をとりもどす	定行 まり子 (住居学科)
12月2日	いま、子どもの“食べる”を考える	太田 正人 (食物学科)
2月10日	子ども消費者の安全を考える ～子どもは体の小さな大人ではない～	細川 幸一 (被服学科)

子育てサイエンス・カフェ アンケート

イベント名：＜第13回 子育てサイエンス・カフェ＞

より良い子どもの遊び環境の実現に向けて

－震災後の福島の子どもの遊び環境回復を事例に考える－

日 時：2023年6月17日（土） 13：00～14：15

場 所：オンライン開催

参加人数：26名

アンケート：16件（回収率：61.5%）

＜Q1＞今回のイベントをどこで知りましたか？（複数回答可）

本学ホームページ	4
子育てサイエンス・ラボ メールマガジン	2
子育てサイエンス・ラボ ニュースレター「ゆりのき」	1
本学SNS（twitter・Facebook）	0
JASMINE-Navi（学内者のみ）	2
学内掲示	2
各自治体等からのお知らせ（Web等）	3
各自治体等からのお知らせ（チラシ）	0
その他	3

その他…幼稚園からの案内、学内配布リーフレット、教員からの案内

＜Q2＞今回のイベントにどのようなご興味があり参加されましたか？

- ・震災や防災を受けた方々にどのような支援が出来るのか、学びたいと思い、参加しました。
- ・東京と近い福島で子供たちが今どのような変化のなかで生活、遊びが行われているのか知りたかったため
- ・震災時の子どもの遊び
- ・私自身が福島県緊急派遣スクールカウンセラーとして10年ほど勤務し、またUNICEFの活動としても支援に入った経験から興味がありました。
- ・コロナ禍に産まれた娘と通ずるものがあるかと考え参加させていただきました。
- ・子どもの遊び場環境に関心があった為。
- ・福島の子どもたちの遊び場確保のために、今、どのようなことが課題になっているのかを知りたくて参加しました。何の支援が、今、求められているのだろうか、と思っていました。
- ・震災後の子どもたちの遊ぶ環境がどう確保されているのか実例を知りたかった
- ・震災から10年以上経った現状を知りたいと思ったため。
- ・子育て世代として、参考になればと思い、参加しました。
- ・子育て支援について興味があり、特に福島の具体的な事例についてお聞きしたいと思いました。
- ・遊びを通して福島の復興を考える、という点です。
- ・外活動の制限下における遊びの工夫や展開についての知見を得たく参加しました。
- ・子育てがしやすい社会としてどのように遊び環境を回復をされたのか具体的な実践事例が聞けることとまた今後の保育に活かせることがあればと思い参加しました。

- ・福島の子ども達の遊び環境を知りたいという思い、そして、もしも自分自身が被災した場合、子ども達の遊び場をどう確保するのかを参考にさせて頂きたく、参加させて頂きました。
- ・子どもの遊び福島の現状

※原文ママ

<Q3>今回のイベントについて自由なご意見・ご感想をお書きください。

- ・放射線が子どもに大きな影響を与えると知り、子どもたちが安全に遊べる環境を整えることが大切だと思いました。また、災害によって家から出られず、孤独を感じる人たちもたくさんいると知り、そういう人たちにも支援が必要だと思いました。
- ・震災後の子供たちご家族の方が、いまだに普通の暮らしに制限があるとはおもいませんでした。少しでも、子供たちの笑顔や安らぎを与えられるよう何か身近で取り組めることはないか考えていきたいと思います。娘とも震災について絵本などで語り、助け合いの心を伝えていこうと思います。
- ・ベップキッズに支援に入ったこともあり懐かしかったです。
- ・福島の遊び場と子育て環境の相関性について拝見出来て、勉強になりました。子どもの意見をどのように反映された遊び場があるのか、お聞きしたいと思いました。
- ・子どもの遊び場の問題は、実は保護者の生活資源の獲得や自己肯定感のようなものにも関わっているのだということについて勉強させていただきました。ありがとうございます。福島の子どもたちの遊び場の場のリーダー育成のようなもの（雑司ヶ谷プレーパークの遊び場のリーダーのイメージ）は、もっと東京にいる私たちにも関われるのではないかとお話しをお聞きして思いました。通信環境などは、事前に練習をして安定度を把握しておくことは必要だと思います。学科内のメンバー（私も含めて）に、遠慮せずに練習相手をお願いしてください。しかし、そのなかでも落ち着かれて対応されていてそこはとてもよかったです。おつかれさまでした。
- ・子どもたちの遊び場の状況だけでなく、制約のある親たちの状況を知ることができました。そういった親たち、さらにはその子どもたちへのエンパワメントや保養の効果は、子育てやケアするものたちへの効果としての、重要な投げかけとなるのではないのでしょうか。
- ・子どもが通っていた幼稚園は、元々福島の園と関わりがあったため、園長先生は、園児たちへの震災の影響をすごく心配されていたことを覚えています。園児が葉や砂、自然に触れられないことを嘆いておられました。安全を守りつつ、被害をきちんと知ること、風化させずに今後活かしていくことが重要だと改めて思いました。
- ・学外の方でも参加可能なイベントで、たいへんありがたかったです。
- ・独自の調査など定量的なデータも多く含まれていて福島の事例についてよく理解できました。また、行政などが抱える課題についてもわかりやすかったです。
- ・これまで、子どもの発達や保育という視点で遊びをとらえていました。また、遊びの持つ治癒力、トラウマ性体験の再現の手段としての遊び、ケアプレイをすることで子どもの心の治療という視点で考えていました。家政経済学という視点でとらえるということが斬新でした。子育て家庭が生活内部の資源をコントロールしていく力→生活意識の変化につながる。どのような遊び環境が必要かという課題に向きあっていく。災害後の発達障害児の遊び環境を考えることも大切だと考えています。今も福島の問題は終わっていません。単なるケアではなくて、心理、教育、治療が長期にわたるケアが必要だと思います。
- ・前半、ご講演される先生のネットの接続が安定していなかったもので、少し集中しづらい状況になってしまったのが残念でした。福島の子どもたちの環境を思うと心が痛みます。僭越ですが、

遊びの工夫など、もう少し具体的な内容もあれば、子育てをされているお母さんたちや保育士さんたちのヒントになったのでは…と思いました。

- ・これからの遊び環境作りに向けて私自身アンテナをはっておくこと、それが可能となるように日々情報・知識を得ること、心身の調子を良い状態に保つことを大切に日々子ども達と関わっていきたいと思いました。
- ・この度は貴重な情報共有をありがとうございます。確実なアンケートに基づいたデータ調査から福島現状を学ぶだけでなく今後の課題も知ることが出来、子ども達やその保護者を取り巻く環境を理解することが出来ました。子ども達がのびのびと遊べる自然環境を取り戻す為、どうか今まで遊び場となっていた森の散策道等の除染も進むことを祈るばかりです。今回のイベントへの参加をきっかけに自分の子ども達にも震災の事実を話し、知識を共有させていただきました。
- ・実際のデータをもとに、福島現状や遊びについて知ることができてよかった。

※原文ママ

<Q4>社会連携教育センターでは、今後もいろいろな企画をしていく予定です。どのような企画があるとよいか、ご自由にご記入ください。

- ・子育てをしていると孤立しがちで情報も片寄るなかでも、先生方の沢山の世界観が広い素晴らしい方のお話を聞けることはとても、有意義な時間でした。また、子育てや遊びにおける企画がありましたら嬉しいです。また、私個人、法律の勉強をすこししているため、児童法について学んでいきたいなと思っております。本日はありがとうございます。
- ・近年地震も増えており、年々語られることが少なくなる福島の震災での話や熊本の話はとても貴重に感じられました。
- ・外部講師による社会教育の現状等もお聞きしたいと思いました。
- ・災害時及び災害後の保育士、看護師、支援員等の支援の在り方について
- ・今年度からこども園に関わるようになり、地域との連携について、大学に求められているように、こども園、保育園にも求められていることを知りました。相乗効果を創れるような仕掛けや工夫について学ぶ、あるいは情報を共有する機会があればありがたいです。
- ・近年は子ども達の間でもSDGsへの理解が進み、その一環としてエコバッグやマイボトルを使用する方も増えているように感じます。これらの他に家庭内で子どもと一緒に取り組んでいること、そして、実践したことで変わったことのアンケートを共有して頂けると、子育ての参考になり有難いです。(節水への声掛け、フードロス等)
- ・子どもに関する企画

※原文ママ

<Q5>よろしければ、あなたのご所属などについて当てはまるものを選択してください。

近隣にお住まいの方	0
小学校のご関係者	1
保育園のご関係者	4
現在子育て中の方	2
本学学生	3
本学教職員	4
その他	2

その他…幼稚園保護者、発達障害児の療育

イベント名：＜第14回 子育てサイエンス・カフェ＞

弱虫は本当にダメか？－アタッチメントの理論から考える－

日 時：2023年7月29日（土）10：30～12：00

場 所：オンライン開催

参加人数：35名

アンケート：19件（回収率：54.2%）

＜Q1＞今回のイベントをどこで知りましたか？（複数回答可）

本学ホームページ	3
子育てサイエンス・ラボ メールマガジン	3
子育てサイエンス・ラボ ニュースレター「ゆりのき」	1
本学SNS（twitter・Facebook）	0
JASMINE-Navi（学内者のみ）	5
学内掲示	1
各自治体等からのお知らせ（Web等）	0
各自治体等からのお知らせ（チラシ）	1
その他	5

その他…在学生による勧め、知人のからの紹介（2件）、家族からの紹介、社会連携事務局から市への案内

＜Q2＞今回のイベントにどのようなご興味があり参加されましたか？

- ・「アタッチメント」をこの間学んだ学んだばかりなので、題名に興味をひかれた。
- ・いつか子育てをする時のために、サイエンスの視点から知識を持っておきたいと思ったから。
- ・岡本先生のゼミの卒業生で、幼稚園教諭をしているので、テーマがとても気になったため
- ・アタッチメントについて学びたかった岡本先生のご講義を聞きたかった
- ・謂わゆる弱虫の子への接し方を、考えるきっかけになると思ったため。
- ・弱虫という一見克服が必要そうに思える子どもだが、それは誤った考え方であり、そのような子をどのように捉え直すべきか考えるきっかけにしたかった。そして今後の子育てはもちろん、子どもと関わる場面で役立てていきたいと思ったので参加しようと思った。
- ・岡本先生のお話が聴きたかったです。
- ・演題に惹かれました（私も幼い頃、「弱虫」「泣き虫」と言われ続けてきたので）。
- ・わが子がいわゆる「弱虫」タイプなので興味を持ちました。
- ・アタッチメントに興味があり、参加しました。
- ・アタッチメントを学習する中で生存戦略としての視点に興味を持ち、それと重なるテーマではないかと思い参加しました。
- ・孫を見ているときに参考になると思いましたので。
- ・子育てを終えた世代になりますが、興味深く感じました
- ・この度も育児の参考になる貴重なお話を共有して頂き、ありがとうございました。
比較的物怖じしない性格の娘（3歳）が、牧場で羊に餌をあげる体験に挑戦しようとした際、怖がってあげることが出来ませんでした。自分より体が大きな動物が怖かったのかな？と考えていたのですが、その後自分より体の大きな馬に乗る場面では、自ら積極的に笑顔で乗馬体験をすることができました。子どもはどんなことに恐怖を感じるのか疑問に待ち、理論的な視点から学び

たいと思い、参加させて頂きました。岡本先生のお話の中で「一歳頃は近づいてくるものが怖い」とお伺いし、羊達が柵越しに餌を握りしめた娘に向かって集まって来たことを思い出し、改めて娘の心情を理解することが出来ました。

- ・ 岡本先生のトークを聞きかかったため。
- ・ 弱虫とアタッチメント理論がどう関わるのか
- ・ 岡本先生が講義されるということで、ぜひ受講したいと思いました。アタッチメントに関するテーマにも興味があり参加しました。
- ・ テーマに興味を持ちました。また、大学の先生のお話を、大人になってからお聞かせいただける機会は大変貴重だと感じ、参加させていただきました。
- ・ 弱虫に焦点を当てている点（私自身幼少期にすぐ泣いてしまう子どもだった）

※原文ママ

<Q3> 今回のイベントについて自由なご意見・ご感想をお書きください。

- ・ 弱虫は強虫である、という言葉が印象的だった。弱虫の方が生き残ることができることから、恐怖は遺伝するというのもまた興味深かった。
- ・ とても興味深い内容でした。様々なお子さんと対面していく中で、保護者の方が悩むことの多い部分だと感じていたので、その弱虫のマイナス面だけをみてとられるのではなく、その子自身をよく見て保護者と共有し共に考えていく姿勢を実践していきたいと思いました。また、人間関係を構築する難しさから逃げてしまっている人が昨今の日本には多いのではないかと捉えていましたが一匹狼の説明がともしっかり来ました。真に向き合い心配していく必要があるのは、一匹狼のことであり、そういう人が増えているのかなと感じています。互いに声をかけ合う力を生きる力の重要な要素と捉え、幼稚園教諭として、子どもたちに接していきたいと思いました。素敵な講義をありがとうございました。学生の頃のことが思い出されてワクワクしました。
- ・ 非常に興味深い講義をありがとうございました。私は言葉やコミュニケーションの発達の遅れがある子どもと親御さまに音楽教育の視点から関わっています。弱虫が病気になる（なっている親御様）や指導者（ピアノの先生）に接するたびに、子どもができるだけ大人たちの影響を直接受けないようにサポートします。そのために、『親が子どもの気持ちに気づく』方法を指導しています。親ごさまに、アタッチメントについて、わかりやすく説明したいと思いました。ありがとうございました。
- ・ 最後の質疑応答での先生のお話を、もっと伺いたかったです。
- ・ 怖さを認めない一匹狼に対して怖さを認め助けを求める弱虫どちらが強いかというお話が興味深かった。弱虫はつまり誰かを頼ることの大切さを一番わかっている、それを他者に示すことができ、結果的に支え合いながら生き残れるので、強い子なのだと考えさせられた。そのため周囲の大人は弱虫も長所にもなりうるかと捉え、子どもの気持ちを分かちあえることが大切だと考えた。
- ・ 孫と接しながら、すぐに折れない心のしなやかさをもった人になってほしいと思います。強がりではなく、弱さを受け入れながら前を向くことが大切なのかなと思いました。岡本先生、妖怪人間ベムのオープニングもすごく怖かったです。ご講演をありがとうございました。
- ・ アタッチメントの概念が広がりました。「アタッチメント＝愛着＝可愛がる」というふんわりとした認識でしたが、「距離感、自律と他律のバランス」という観点からも考え直していく重要性を学ばせていただきました。また、これは「保育者－子ども」という関係性の中でも、とても重要であると思いました。今年度は3歳児の担任を久しぶりにしていますが、母子分離が上手くい

かない時に、「ママがいい！一緒にいたい」という気持ちをまずはしっかり受け止めるために、その子どもが発した言葉を反復するようにしています。そうすると、たいてい、全身の力が徐々に抜けてきて、身を私に寄せてくるようになります。一方で保護者の気持ちは、仕事のために早く預けてしまいたい方、子どもが泣いていてご自分まで泣いてしまいたいくらい動揺している方など、様々です。なかなか前者に、今の子どもの心境をご理解していただくことは難しいのですが、泣いていて困るという気持ちだけに留まらないように、支えていきたいと思います。とにかく「活発な子ども＝生きる力がある・たくましい」と捉えがちですが、教育で求めている「生きる力とはどういう力なのか?」、このあたりもしっかり追究する必要性を感じます。大人しくても芯があり、根気よく物事に取り組む子どもが醸し出している存在感の凄いこと。圧倒されてしまいます。BUCAの時代の到来ですが、AIでは育成できない、「人とのつながり」から生まれるかけがえのない強い力を、信じていきたいです。推し量ることのできない力をどのように肌で感じていくか、この感性を養っていけるように頑張りたいと思います。本日はありがとうございました。

- ・ 論理的なお話から、「弱虫」を肯定的にとらえることができ、心強く感じました。
- ・ 具体的な例が大変わかりやすく、勉強になりました。
- ・ 正直、例示が多く、掘り下げが少ない物足りない内容でした。生き物としての生存戦略とは逆行する社会現象をどのように捉えるべきなのかについても質問したのですが、個人主義と利己主義を混同された上で「個人主義は日本人にはあわない。もっと助け合う民族だったはず」とのことで、民族性をふいに出され、学問上の根拠があるのだろうかとの疑問に思いました。しかし、生き物としての生存戦略と社会のあり方の矛盾については、今後も自分で考えたいという思いを強くしたので、そういう意味では参加してよかったかもしれません。
- ・ 分かりやすく良かったです。
- ・ 子育て世代、保育関係者にとっては意義深かったと思います。
- ・ 4歳までは怖がる対象項目が多くあっても5歳を過ぎると学習により殆どを克服する事が出来るというデータが興味深いと感じました。また子どもの抱える恐怖心は必ずしも克服する必要はなく、子どもの恐怖に気づき、その気持ちを認めながら、表現させてあげられるような育児をしたと思いました。

今後我が娘はどの段階で羊達への餌をあげることが出来るようになるのか、成長を見ることが楽しみです。

- ・ 子育て中の方に興味のあるテーマであり、学問的な裏付けもあり、とても良い企画と思います。
- ・ 人に助けを求めること、人への信頼を育てることに繋がるのと感じました。子育てをしていくにあたり、リアタッチメントも必要であることも学びました。
- ・ 子どもの恐怖に関する実験で、5歳時点ではほとんどの恐怖事態の項目が減少するのには驚きでした。また、子どもの未知のものへの関心には、アタッチメント対象の存在と距離が関与していることをしり、育児をする上で意識をしていきたいと感じました。
- ・ 過去に行われた心理学の実験の内容や、子育ての観点から、弱虫というテーマを掘り下げのお話をしていただきましたが、とても興味深く、学ばせていただきました。
- ・ 過去に行われた実験を交えてのお話がとても興味深かったです。弱虫には人に助けをもらえる、人を動かすという強みがあるというお話を聞き、強がらずに素直に助けを求めるのも生きていく上では必要だと感じました。

※原文ママ

<Q4>社会連携教育センターでは、今後もいろいろな企画をしていく予定です。どのような企画があるとよいか、ご自由にご記入ください。

- ・ 食品開発について、生物の視点から学んでみたい。
- ・ 今回話題にあがった恐怖症について、取り上げていただく機会があれば嬉しいです。
- ・ このようなイベントを、特にオンラインで開催して頂けることに、感謝しております。次回以降も楽しみにしております。
- ・ 幼少期から青年期までの心理の発達について
- ・ 子供がいても、気軽に参加できる企画はいいなと思いました。
- ・ ○子ども向け（親子向け）本学学生企画：親子で楽しめるような内容、対面で
- 子育て支援の一環として、定期的な遊び場・保育の提供：地域に開かれた子育て支援として（学生ボランティアも集い、学生・保護者・研究者の互惠性を基盤とする子育て支援の確立）
- ・ 発達の凸凹があるタイプのケアについて。
- ・ ぜひ、盛岡市と連携した事業展開ができるとうれしく思います。
- ・ 講義前半に触れて頂きました子どもの自己肯定感について、岡本先生の考えるソーシャルメディアとの理想的な関わり方を交えた内容でお話をお伺いできましたら嬉しいです。
- ・ 基準となる発達の過程を知ることが大切ですが、発達の過程は一様でないことを考える企画があってもいいと思います。
- ・ 子育て支援をしている様々な職種や子育て中の方との交流をもてるような企画があるとよいと思います。

※原文ママ

<Q5>よろしければ、あなたのご所属などについて当てはまるものを選択してください。

近隣にお住まいの方	1
小学校のご関係者	0
保育園のご関係者	1
現在子育て中の方	2
本学学生	4
本学教職員	3
その他	8

その他…幼稚園教諭、卒業生、保育園勤務・通信教育科目履修生、盛岡市、幼稚園志願者、助産師

イベント名：＜第15回 子育てサイエンス・カフェ＞

クライシス（災害・パンデミック）から子どもの日常生活をとりもどす

日 時：2023年9月30日（土）10：30～12：00

場 所：オンライン開催

参加人数：29名

アンケート：10件（回収率：34.4%）

＜Q1＞今回のイベントをどこで知りましたか？（複数回答可）

本学ホームページ	0
子育てサイエンス・ラボ メールマガジン	2
子育てサイエンス・ラボ ニュースレター「ゆりのき」	1
本学SNS（twitter・Facebook）	1
JASMINE-Navi（学内者のみ）	1
学内掲示	4
各自治体等からのお知らせ（Web等）	0
各自治体等からのお知らせ（チラシ）	1
その他	1

その他…教授会資料（1件）

＜Q2＞今回のイベントにどのようなご興味があり参加されましたか？

- ・ 震災や感染症の被害にあった子どもたちへの支援
- ・ 災害が子供に与える影響について知りたいと思ったため。
- ・ 子どもの環境について興味があり、クライシスが起きたときの状況や解決方法を知りたいと思ったからです。
- ・ 有事の際のこどもたちの状況
- ・ 保育士資格があり現在は訪問介護の仕事をしており災害時の取り組みについてということ、一級建築士の先生のお話に興味がありました。
- ・ 子育て真っ最中で、関東大規模地震が予測されてる中、参考にしたいと思いました。
- ・ 現代の子育て支援について把握し、児童学科の学習に参考にする為
- ・ 幼児・児童の教育環境・生活空間に関心があるため。
- ・ コロナ禍からの過渡期にあると思われる現在なので興味を持った。
- ・ 異常気象の中、最近では何が起こるかわからない状況下で、毎日子どもたちと楽しい時間を過ごしています。私たち保育者は、何より子どもたちの生命を守ることに全力を注がなければならないと日々考えています。ということで、とても興味深い内容に感謝いたします。

※原文ママ

＜Q3＞今回のイベントについて自由なご意見・ご感想をお書きください。

- ・ 特に震災後の被災地での調査は興味深かった。
- ・ 震災、コロナと種類の異なる災害での影響を比較して聞くことができました。先生のスウェーデンでの実体験が特に興味深かったです。
- ・ 津波や放射能といった問題が起きたときの保育施設の状況や課題について改めて確認することができ、私自身もこれから起きるであろうクライシスの中でどのように行動できるか、考えていく

必要があると感じました。また、日本国内での話だけでなく、スウェーデンにおける保育の環境について知ることができたので、貴重な時間をありがとうございました。

- ・ロックダウンがなかったスウェーデンにおける保育の状況が気になっていたので、お話が聞けて嬉しかったです。日本において子どもが育っていくための環境が、多方面で不整備、不寛容であることなどを改めて感じました。震災時の保育施設の方々のお話は胸が詰まる思いで拝聴しました。同時に、私自身も保育施設の職員なので、有事の際に子どもたちの命を守ることができるのか不安や危機感を覚えました。貴重なお話をいただきありがとうございました！"
- ・3.11やコロナなど子ども達に関わる人はどう行動し環境はどのような影響があるのか海外の取り組みなども良く分かりました。
- ・専門家のお話を聞ける機会はなかなかありませんので良かったです。避難のお話、海外の教育のお話興味深かったです。また、土曜日午前中にzoomで参加できますのも時間がとりやすく助かりました。
- ・東日本震災やwhthコロナ時代の子育て環境について、課題を感じました。政策と必要支援の差異です。
- ・被災地での調査・記録・分析を粘り強く継続してこられたことは素晴らしいと思いました。ご紹介されたスウェーデンの保育園は、文化的・伝統的生活心情と公的施策の理念とが、まさに建築として合致して幸福な形を成している例と考えました。一方、我々の暮らす東京という大都市には、最大級の災害に対する備え、持続可能な居住空間の改良が焦眉の問題として影を落としています。実際のところ庶民には、災害時も安全でしかもスウェーデンのような幸福な空間設計を享受することはなかなか困難です。その中で、特に幼児・児童の安全確保・快適な居住空間の実現に焦点を当てて、そこから都市の未来を切り開いていく改革の道は最も説得力があり、有効と信じます。
- ・東日本大震災の復興にあたり、建築の先生がこのように尽力されていたことを初めて知りました。様々な専門家が関わっておられたことを改めて知り、復興支援にはいろいろな形があること、一人ひとりにできることがあるのだなと感じました。
- ・大変わかりやすく、とてもよかったです。

※原文ママ

<Q4>社会連携教育センターでは、今後もいろいろな企画をしていく予定です。どのような企画があるとよいか、ご自由にご記入ください。

- ・今回のようにWEB開催だと遠方の身としては非常に助かります。保育や教育の場において、子どもにとって環境の重要性は理解していても、具体的にどのような環境が重要なのか理解度が不足している、あるいは、そもそもあまり数値化されていない現状があるので、そういった内容の企画があると嬉しいです。(非常に抽象的ですがすみません！)
- ・発達障害について
- ・●高齢者の社会参加とフレイル予防 ●大人のリスキリング（学び直し）の重要性 ●働く女性と子育ての環境の現状等、
- ・発達障害に関すること。
- ・大学での研究やデータをもとに、私たちのように日々忙しい毎日を過ごしている子育て中のママや保育者等に、多方面にわたり短時間で、いろいろな情報を分かりやすく解説していただけると嬉しいです。

※原文ママ

<Q5>よろしければ、あなたのご所属などについて当てはまるものを選択してください。

近隣にお住まいの方	0
小学校のご関係者	0
保育園のご関係者	1
現在子育て中の方	0
本学学生	3
本学教職員	2
その他	2

その他…附属幼稚園保護者、福祉施設職員

イベント名：<第16回 子育てサイエンス・カフェ>いま、子どもの“食べる”を考える

日 時：2023年12月2日（土）13：00～14：30

場 所：オンライン開催

参加人数：34名

アンケート：17件（回収率：50.0%）

<Q1>今回のイベントをどこで知りましたか？（複数回答可）

本学ホームページ	4
子育てサイエンス・ラボ メールマガジン	4
子育てサイエンス・ラボ ニュースレター「ゆりのき」	1
本学SNS（twitter・Facebook）	0
JASMINE-Navi（学内者のみ）	3
学内掲示	1
本学以外のWebやメールマガジン	1
チラシ	2
その他	2

その他…知人の紹介

<Q2>1.で「本学以外のWebやメールマガジン」を選択された場合、どちらの媒体でしょうか。

（例：かわさきの生涯学習情報、文京区フミコムメールマガジン 等）

東洋大学ボランティア支援室

<Q3>1.で「チラシ」を選択された場合、どちらで配布されたものでしょうか。

（例：区民センター、〇〇幼稚園 等）

教育委員会、梶原町役場内

<Q4>今回のイベントにどのようなご興味があり参加されましたか？

- ・子どもが産まれるにあたり、食事は一生ことなのでスタートが肝心と思い、情報収集のため参加いたしました。
- ・子どもの食事の与え方。
- ・生活に欠かせない“食事”について色々聞けると思い、参加しました。
- ・食育に関して興味があったので参加させていただきました。

- ・子どもにとって適切な食事について知りたいと感じ参加させていただきました。
- ・今後、管理栄養士として子どもを対象とした業務にも関わることがあると思い、参加しました。
- ・食物系の研究室に所属しており、太田先生のご講演だったので参加しました。
- ・孫の食生活に興味があった。
- ・私自身の食生活や、子供を生んだ時に備えて関心をもった。
- ・幼児期の食事について 咀嚼、嚙りとり大切さ、噛んで食べない子が多くお茶で流し込む。対処法を学ぶ
- ・私は現役保育者です。また、保育の立場から食育をしたいと考えております。現在、本学院生でもあり太田先生の講義を受講させて頂き、今回参加しました。
- ・家族みんなが食べることがとてもだいすきであり、私自身子育てするなかで食べることについてもっと学びたいという思いから参加しました。
- ・乳幼児の食について、その重要性を御家族にどのように伝えるのか、知識を得る為に参加しました。
- ・大変お世話になり学び、昔、太田教授感謝です、老化ガタで、つい又お聞きしたくて参加です、孫6人、
- ・子どもの食について
- ・子どもの食生活は成長していくなかで重要な要素だから。
- ・こどもと「食」の関係

※原文ママ

<Q5>今回のイベントについて自由なご意見・ご感想をお書きください。

- ・先生の講演内容もさることながら、質問者の方のお話も気づきが多く、大変勉強になりました。
- ・本日の資料はいただくことは可能でしょうか。
- ・自分自身の幼少期のころの食事を思い出しながらお話を聞いていました。虫歯について、間食について、歯磨きの習慣化についてなど多くのことを改めて考える機会になりました。ありがとうございます。
- ・とても分かりやすく有意義なお話をありがとうございました。
- ・この度は貴重なお時間をありがとうございました。間食の選び方についてのお話がとても参考になりました。「おやつは甘いもの」という漠然としたイメージを親子共に持っておりましたが、甘いものだけではなく先生にご紹介頂きましたポテサラや餃子等おかずにもなるような栄養のあるおやつを積極的に食べさせたいと感じました。
- ・調査データをみて、虫歯や肥満の予防に対する意識を高めるだけでなく、今回のお話のように注意すべき内容を明確に伝えることが重要であると感じました。自分自身が親になったときにも役立つ知識を得られてよかったです。また、成長の早い遅いではなく、本人に向き合うことが大切だというお話も心に残りました。丸呑みのお話に関しては、せっかく幼少期に噛む習慣がついても、学校給食では食事の時間が短く丸呑みに近い形で食事をしている児童生徒が多いとも感じます。様々な制約の中で、食事の環境をどのように整えるか、改めて考えていきたいと思いました。
- ・昔に比べ成長が早くなっていること、適した食べ方や食後の歯磨きのことまで知ることができました。子供への食の関心の導き方を大切に将来注意したいと思います。
- ・歯磨きの大切さを知った。次回お泊りやな来たらさっそくやってみます。
- ・スクロースの摂取でエナメル質が溶けてしまうことに対して、印象深かった。

- ・親が保健師や医師から体重が平均より少ないと指摘され、とにかく食べさせようとする。親にアドバイスできればと思います。間食の与え方、よく噛んで適量を食べることの大切さを教えて頂きました。
- ・大変参考になりました。乳幼児期の食について、丸飲みや偏食や親が思うように子どもが食べてくれない、といった事にはちゃんと理由がある（お口の環境）ということを本日、学びました。乳幼児は食べられない理由を言語化することが難しい為、大人（親や保育者）が理解し、気持ちを代弁していく必要があると考えますが、保育の現場においては乳幼児の食事があまりに日常であるため、問題意識を持つ事が難しいのかもしれませんが。一保育者として、本日の話を園で共有したいと思います。ありがとうございました。長文、失礼致しました。
- ・子供の年齢に合わせた食事よりも、子供一人一人の特性に合わせた工夫が大切であることに感銘を受けました。子育てでわからないことや不安なことがあっても、一旦我が子の様子をじっくりみて観察し無理なく楽しく食事を大事にしていこうと思いました。また、私たちの身の回りにある食べ物はたくさんの方々支えと研究のもとで多くの工夫がなされていることに感謝しながらこれからも過ごしていこうとも思いました。
- ・講座とは別ですが、休憩が無かったので間に5分でもあると良かったです。
- ・72歳私事ですが、17歳の時事故で自転車ハンドル口に、下の前歯4本失いブリッジです、残る歯の為、年2回歯石取り、食のあと、水含みスーパーフロス使い、長年気を付けてます、興味深い内容、謝謝！甘味料ドリンク他、砂糖、孫達へ工夫します
- ・いろいろなデータに基づくお話で、自分の子育てを振り返りながら聞かせていただきました。
- ・専門的に研究されている先生からお話を伺うことで、ここ数年の変化や統計的にみて効果的な対応などについて知ることができて良かったです。貴重なお話をありがとうございました。小学生向けの学童保育をやっています。日常的にはおやつとして市販の駄菓子を出していて、準備ができる時は季節の果物や手作りのお菓子、おにぎりなどを出しています。砂糖依存症について前から気になりつつ、便利な市販の駄菓子に頼っていましたが、砂糖の選び方や考え方も教えていただけて良かったです。豆まき大豆をおやつに選ぶと良い、なども参考になりました。また、保護者の方ともどんなおやつを出しているのか共有することが必要かなと省みる機会になりました。

※原文ママ

<Q6>社会連携教育センターでは、今後もいろいろな企画をしていく予定です。どのような企画があるとよいか、ご自由にご記入ください。

- ・現在3歳の子どもが様々な絵本の世界に夢中です。どれ位の年齢からファンタジーと現実の世界の違いを認識し始めるのか、もしくは親として伝えるべきかを疑問に感じることもあり、是非とも専門の方のご意見を聞けますと幸いです。
- ・食に関する内容
- ・現在子どもに起こっている問題を様々な角度から取り上げて欲しい。
- ・来年4月にできる建築デザイン学部についてきいてみたいです。
- ・健康
- ・子どもとメディアとの関係など
- ・私は仕事で小中学生と関わることが多いですが、今回のように子育て、子どもの育ちについて幅広く学べる機会があると良いなと思いました。次回も可能な限り参加したいですし、周りの人も誘ってみようと思います。

※原文ママ

<Q7> イベントに参加しやすい曜日・時間帯について、ご自由にご記入ください。

(例：土曜13時～、日曜午前中 等)

土曜午後	6
日曜午前	2
土曜午前	1
土日夜間	1
平日午後	1
曜日問わず日中	1
特になし	1

(回答内訳)

- ・土・日夜間
- ・土曜日13時～
- ・曜日問わず、日中のお時間に開催して頂けると嬉しいです。
- ・土曜午後
- ・日曜午前中
- ・土曜日 午後 13時
- ・土曜日13時～
- ・特になし
- ・平日午後
- ・土曜午後
- ・土曜10時～、13時～、日曜10時～

<Q8> よろしければ、あなたのご所属などについて当てはまるものを選択してください。

近隣にお住まいの方	0
小学校のご関係者	1
保育園のご関係者	1
現在子育て中の方	1
本学学生	5
本学教職員	0
その他	8

その他…専門学校関係者、卒業生、幼稚園の保護者、支援員、本学通信制、東洋大学学生、教育関係のNPOの職員

イベント名：＜第17回 子育てサイエンス・カフェ＞

子ども消費者の安全を考える～子どもは体の小さな大人ではない～

日 時：2024年2月10日（土）10：30～12：00

場 所：オンライン開催

参加人数：68名

アンケート：38件（回収率：55.9%）

＜Q1＞今回のイベントをどこで知りましたか？（複数回答可）

本学ホームページ	3
子育てサイエンス・ラボ メールマガジン	3
子育てサイエンス・ラボ ニュースレター「ゆりのき」	1
本学SNS（twitter・Facebook）	0
JASMINE-Navi（学内者のみ）	2
学内掲示	2
本学以外のWebやメールマガジン	4
チラシ	7
新聞等の媒体	10
その他	8

その他…消費者関連団体からの広報

＜Q2＞1.で「本学以外のWebやメールマガジン」を選択された場合、どちらの媒体でしょうか。

（例：かわさきの生涯学習情報、文京区フミコムメールマガジン 等）

NACSホームページ、日経新聞

＜Q3＞1.で「チラシ」を選択された場合、どちらで配布されたものでしょうか。

（例：区民センター、〇〇幼稚園 等）

附属豊明幼稚園、附属豊明小学校、梶原町教育委員会、文京区内大学担当者会議

＜Q4＞今回のイベントにどのようなご興味があり参加されましたか？

- ・子どもの消費者教育
- ・製品安全について
- ・教育や親子関係、子育てに興味があった。
- ・近年ニュースでは、SNSの危険性などはよく取り上げられていますが今回のような危険性について深くは取り上げていなかった為参加致しました
- ・消費生活センターに勤めている者として、興味があるイベントなので、参加した。
- ・「消費者教育」の概念ではなく、具体的な内容を聞き出来るかと思い参加しました。
- ・子どもの消費者教育
- ・通信学生の者です。昨年、集中スクーリングで細川先生の講義を受け、とても楽しく勉強になったこと、先生のお考えに共感できる場所が多かったことから今回の講座も受講しました。
- ・消費者としての子どもという視点
- ・子どもに特化した消費者の安全の問題について知りたかった。
- ・子供の安全に安して興味があったから参加しました。

- ・子ども消費者とは、消費者教育ではどのようなことをなされているのかを知りたいと思いました。
- ・日頃からこどもの消費者被害に関心があるので
- ・子どもの安全について
- ・子どもの消費
- ・NACSの活動の「標準化のタネ」を探すために何かヒントがないかと考えました。
- ・1丁度、来客と重なり受講できませんでした。とても興味がありましたので残念です。見逃し配信があれば有り難いです。
- ・子どもは体の小さな大人ではない という言葉にハッとしたため。
- ・こどもの消費形態を知りたかった
- ・こどもの消費者法
- ・細川先生のお話が久しぶりに聞いたかったからです。子供の消費者としてどう捉えているのか気になったので。
- ・日常から安全を守るため人として何を意識して生活するべきかを学びたかった
- ・子供の消費者教育について興味がありました。
- ・保育に関して、特に子どもの事故に関心があったから
- ・講師が細川幸一先生であったこと、テーマが子どもの安全だったから
- ・子ども向けに「ライフ・リテラシーゲーム」というキャリア教育用のボードゲームを開発しており、次回作に消費者教育の内容を検討しているため参加しました。
- ・消費者教育の方法（学校の家庭科や家庭内での教育）について知ることができるかもしれないと思ったため
- ・本公演は新聞で知りネット検索をしました。「スマホを小学生でも持っている時代です。」「また、その年代からブランドものを欲しがる子もいると聞きます。」「子どもに対する消費者教育の重要性が指摘されています。」「子ども消費者を巡る問題を考えます。」というリーフレットだったので、「子どものときから消費者になり得る子供達の消費を巡る問題を考える」内容（買い物依存など）だと思って申し込みました。中学生の娘の「消費」について、間違った方向へ導いていないか気になっていたのです。
- ・子ども消費者の保護について興味がありました。
- ・大学院の指導教員の講演だったため。
- ・子供の危険
- ・製品安全について
- ・こども消費者をめぐる問題ということで、小学校家庭科での消費者教育の授業に取り入れられる視点や内容のきっかけとなればと思い受講しました。また、zoomでの受講初挑戦でもあったので。
- ・子ども＝消費者という、今まで考えたことのなかった子育てのテーマだったので。
- ・子どもの安全に関して、どのような議論が起き、どのような方向に向かっているかに関心があったため
- ・子どもは体の小さな大人ではない、というテーマが心に残り学んでみたいと思ったから。
- ・子育てに関わる内容だったため
- ・一言に子供といっても時代や法律などによって、その位置付けが違うこと

※原文ママ

<Q5> 今回のイベントについて自由なご意見・ご感想をお書きください。

- ・子ども向けマーケティングについて考えたことがなかったので新鮮だった。また安全・便利だからこそ危険回避能力が育たないというのは新たな気づきだった。
- ・1つ1つの危険性を事例と共に説明をして下さり分かりやすかったです
- ・講師の話が分かりやすかった。
- ・具体例があり、分かりやすく親としての考え方のヒントとなりました。ありがとうございます。
- ・子どもは誰でも明日の消費者であるからこそ、幼児や小学生の時からお金について学ぶ必要があると思います。
金融教育 投資ではないので、高校からではなくもっと早く取り入れてほしい。
- ・先生の見解をたくさん伺えてとても楽しかったです。ネット社会となり、子どもだけでなく大人も多種多様な消費者トラブルが発生する時代となってきています。子どもだけでなく教育者側の大人も日々消費に関する知識や事故について学びを深めていくことが大切だと改めて感じました。
- ・あまり深い議論がされていなかった
- ・幅広い視点から子どもの安全性を指摘されていて興味深かった。特に、安全性を担保しすぎてしまうと逆に危険を回避する力が失われるというのは、日ごろぼやっと感じていたことであり、その考え方に共感した。子どもの視点を取り入れながらの安全教育の重要性を再確認できました。ありがとうございました。
- ・身近の課題をわかりやすく教えて頂き大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・一般市民でも参加しやすい、わかりやすくお話いただけだったので、なるほどと思いながら拝聴しました。家政学というのは幅広く、重要だと思いました。ありがとうございました。
- ・体系的にご説明いただきありがとうございました。本題にもう少し突っ込んだ内容も聞きたかった。
- ・子どもの安全を考えるで課題となっている点を理解することができました
- ・和やかな感じと事前に聞いていなかったら戸惑ったでしょう。最初20分位、本題に入らず。
- ・安全で便利なぬるま湯のような生活にどっぷりつかってしまうと、ちょっとした不具合にも対処できない人間になってしまいますが、完全に事故の原因になりうるとわかっているものは排除していかなければいけないなと思いました。自動車のアクセルとブレーキについて（もともと運転は得意ではなくオートマ限定ですが）つい先日「なぜこれらはすぐそばにあるのか」と疑問かつ恐怖に感じたばかりでした。これ以上事故が増えないように設計が変わるとよいと思います。
- ・小学5年生の娘がいますが、(学校で教わっているかもしれませんが) ガスや電子レンジはどんなことに気をつけなくてはいけないのか、など、子供がきちんと理解しているかどうか確認してません。学校で教わっても時がたつて記憶や理解が薄れたり忘れている可能性はありますし、普段家庭で教える時間がとれてません。小学生の高学年では家庭でどんなことに注意する必要があるのか親が考え、調べたりして学ぶ必要があると感じましたし、そう思うきっかけとなりました。
- ・主に最近のこどもの消費行動を知りたかったが、今回お話された内容はそれとは少し違ったものの、とても興味深い内容だった。先生の視点から講義していただき、小さいこどもの安全がまだまだ保証されていないこと、子育てを離れたわたしのようなものには、なかなか、まとまった情報が入ってこない現状（みんなで子育てしている意識を多少は持っていたにも関わらず）を深く認識した。先日、ラジオで、味のついていない飲料である水道水などが飲めない子どもが

いると聞いたことを思い出した。味のついている飲料ばかり飲んでいるからのようだ。オートマチックやオール電化になれて元のことがわからないのと同じではないかと思った。確かに、これらは、こどもの消費者としての問題なのだという視点を得られたのは、大変よかった。また、事例を集めまとめて発信、提言していくことが、まだこれからとのこと、もうすでに、活発にされていると思っていたので、驚いた。やりたくても、いろいろな事情でできなかったのではと思います。安心して子育てできる社会のためにも、わたしも気を付けて、今回の参加を生かしたいです。よい機会をありがとうございました。

- ・ グレーゾーンの法作成は慎重さを要する気がした。子どもだけでなく、デジタル化が進み、デジタルに不適応な高齢者はデジタル化で権利を損ねてる部分を法律で支援される時代がきたのかな？と受け止めた。
- ・ そういうところが気になるんですね、という、新たな視点をいただけたように思います。
- ・ あらゆるものに危険と安全が混在されているが、大事なものは子育てにおいて発達段階に応じた配慮や経験をさせることが子供の創造性を豊かにすることだと感じました。子供マーケティングにおいても、過度に危険を意識するのではなく、時に危険を予知できる話もさせつつ、子供は適切な判断が難しいという認識のもとで見守ることの重要性を学びました。さらに、物事を自己責任にとどめず、発信や相談することで解決に結び付くことあることも深められました。ありがとうございました。
- ・ 子供に関わる学科の先生だけでなく、多方面の先生方のお話を伺えたことも大変有意義でした。子供のマーケティングという視点を親が持つことで、子供が将来消費者として、商品などを選択する際に、よりよい判断をする上での基礎を養うことが少しでもできるのではないかと、大変勉強になりました。
- ・ 言われてみれば、考えなければならぬことが沢山あると思いました。一番難しいのは、安全な環境を整えつつ、しかし、自分で自分の安全を守る目や気持ちを育てることだと感じました。
- ・ 大変興味深く聴講しました。当方、NACSで標準化にかかわっており、子どもの安全は以前から関心を寄せていました。今回細川先生のお話の中にも、世間に知られていないものがあり、例えば、函館ゴーカートの際は、エンジンの乗り物であったことなど、勉強になりました。また、成人年齢と成人式の不一致なども面白く拝聴しました。
- ・ すべてがとても勉強になりました。特に子ども向けのマーケティングには何らかの規制をかける必要があるという点と、消費者と企業側双方への働きかけや認知が必要であるという点は重要だと思いました。「子どもは小さな大人ではない」という視点は、社会全体で認識しなければならないものだと思います。
- ・ 予想していた話ではなかったが、様々な事例を聞いて、消費者の自己責任で終わらせるだけでなく社会の仕組みの不備も同時に考えていくことが大切だと思った。
- ・ 想定した公演内容ではなかったものの、何か得られるものがあるだろうと視聴していました。アンケート8.から推察するに、ある程度専門知識のある方向けの内容のようですが、当方ただの中高生娘の母としては、全体を通して、新聞やネットで知っている事例の列挙とそれに対する先生のご感想だけで、「学び」に繋がる部分を感じられませんでした。
- ・ 細川先生のご説明がとてもわかりやすく、理解が深まりました。参加して良かったです。住居学科や児童学科のかたも参加していたので、最後のディスカッションでは、それぞれの専門分野のお話もあり興味深かったです。
- ・ 都合で途中退室したのですが、大変勉強になる内容でした。ありがとうございます。
- ・ 子供の自己決定権の話は考えさせれる切り口でした。

- ・気軽に楽しい雰囲気、身近な話題を考えるきっかけになりました。消費者教育については、自分自身の知識など、まだまだこれからだと実感し、引き続き学んでいこうと思いました。
- ・消費者教育とは、生活する上でとても大切なことなのに、確かに教育の機会がほぼ無いということに改めて気づきました。なんでも手軽に買える、高価なものを買うにはたくさんのお札を握りしめてお店に行くということもなくなり、消費の実感が薄い時代に生まれた子どもたちに伝えるべきことを、見落としてはいけないなと思いました。ありがとうございました。
- ・様々な事例、現場で子どもたちに対応している方々からのお話も聞けて学ぶところが多くありました。子どもは小さな大人ではない、とはまさしくその通りで、その安全性の確保には、大人に向けた商品以上に多角的な視点を必要とするように思います。そのような広範に安全を確認する姿勢が、実はボーダレスに他の様々な属性の人々を対象にした商品、そして大人への商品等の開発の際にも生かされるという、意識を共有したいと思いました。
- ・あらゆる場面、状況を想定して製品を作っていること、また、改良していることがわかった。高齢者の交通事故が多いので、細川教授が言われていたアクセル、ブレーキの踏み間違いが減るような車を早く開発してもらいたい。
- ・聴講していて、「たしかにそうだな」というと思う場面が多々あって面白かったです
- ・子どもが大事にされる時代、地域でよかったと思います。

※原文ママ

<Q6>社会連携教育センターでは、今後もいろいろな企画をしていく予定です。どのような企画があるとよいか、ご自由にご記入ください。

- ・社会問題について学ぶ会がありましたら参加したいです。
 - ・子育て世代の消費者問題をまた取り上げてほしい。
 - ・金融教育
 - ・食に関する講座
 - ・子供の安全、住まいの安全などです。
 - ・子どもの食育
 - ・AIやSNSの取り組み方法や利用方法などは、よく講習がありますがもし、全く使用しないとしたら、どうなるのか?についてお聞きしたいです。
 - ・大学ならではの視点で、とくに、今回のような、こどもを取り巻く環境のことを取り上げていただくと嬉しいです。
 - ・今回のような人が考えつかない問題を焦点にしてほしい。
 - ・現在はネットによる学習が学校でも進められていますが、それが子供にどのように影響するのか実際の現場のお話をききたいです。私自身、試験や授業も紙に書いたり学び、先生やクラスのおともだちとの対面コミュニケーションにより多くのことを経験してきたものとして、最近ではネット授業で解決ができ、Web上での友達作りができそれが普通になりつつ世の中が少し不安があります。学校は、辛い大変なことも経験することが大事だと思いますが、便利な世の中になってきた今楽で楽しいことを好んでばかりでは子供が社会人になっては大丈夫だろうか心配もしています。
- 是非現場の先生に、実際の生徒さまの様子をきけたらと思います。本日はお忙しい中、素晴らしい講義をしてくださりかありがとうございました。
- ・少子化の現状と、本当の要因について探って欲しい
 - ・私の読解力不足かもしれませんが、リーフレットの文言から想像される内容と講演内容のミス

マッチは改善された方がいいのではないかと存じます。

- ・子どもへの性教育
- ・LGBTQ関連
- ・文化芸術に関すること。ユニバーサルデザインに関すること。

※原文ママ

<Q7> イベントに参加しやすい曜日・時間帯について、ご自由にご記入ください。

(例：土曜13時～、日曜午前中 等)

平日午前	2
平日午後	1
平日夜間	1
土曜午前	15
土曜午後	9
土曜夕方以降	1
日曜午前	13
日曜午後	7
いつでも	2

<Q8> よろしければ、あなたのご所属などについて当てはまるものを選択してください。

近隣にお住まいの方	1
小学校のご関係者	4
保育園のご関係者	0
現在子育て中の方	4
本学学生	4
本学教職員	0
その他	25

その他…消費者団体会員、消費生活相談員、大学教員、大学院修了生、教材開発事業者、医師、子育て支援センター支援員、ボランティアで小学生向けに環境講座を開催、市役所嘱託員、豊明幼稚園保護者、教材開発事業者、女子中高生の保護者、順天堂大学、梶原町一貫教育センター、他県在住者

SDGs特設サイト

2023年度 SDGs特設サイトについて

2021年度に立ち上げたSDGs特設サイトにて、SDGsに関する本学教員の研究や社会連携活動の情報を発信してきた。2023年度は新たに14コンテンツを公開した。次年度以降も、撮影・取材を実施し、コンテンツのさらなる充実をはかる。

日本女子大学×SDGs特設サイト：<https://www3.jwu.ac.jp/sdgs/index.html>



【2023年度スケジュール】

- 2022年5月～ 学内募集
- 2023年4月 4コンテンツを公開
- 2023年8月 1コンテンツを公開
- 2023年8月～ 新規コンテンツ取材・撮影開始
- 2024年3月 9コンテンツを公開

4月公開
太陽光発電の性能を上げるカギは、分子どうしのマッチング!?
理学部数物情報科学科 准教授 村岡梓
フードロス問題は、コミュニケーションの問題です。
家政学部家政経済学科 教授 小林富雄
SDGsの約半分の項目に「移民」が関係している
文学部史学科 教授 北村暁夫
気候変動で日本が水没する!?
人間社会学部現代社会学科 准教授 池田和弘
8月公開
女性の健康を予防栄養学の視点から
家政学部食物学科 准教授 鈴木礼子
3月公開
日本製のエアコンをうまく使って、地球環境を守ろう。
家政学部住居学科 教授 細井昭憲
窒素の動きを知ることは、自然生態系を知ること。
理学部化学生命科学科 講師 上田実希
母親の仕事についてのデータ分析で、子どもの貧困を減らそう。
家政学部家政経済学科 講師 中山真緒
包装で食品を守り、世界を飢餓から守る。
家政学部食物学科 准教授 北澤裕明

臨床心理の専門家にも、経済的な働きがい。	人間社会学部心理学科 准教授 堀江桂吾
質の高い教育とは、いわゆる受験で測られるような学力を高める教育ではありません。	人間社会学部教育学科 教授 清水睦美
数学好きを増やすことで、人々の暮らしをより豊かなものへ。	理学部数物情報科学科 教授 愛木豊彦
1000年前のお寺にも、SDGsの精神は宿っている。	文学部史学科 教授 藤井雅子
「青い眼がほしい」と願う少女への共感を、平等な社会実現への原動力に。	国際文化学部国際文化学科 教授 杉山直子

2023年度 日本女子大学 社会連携教育センター活動報告書

発行 2024年8月1日
日本女子大学 社会連携教育センター
(事務局：学務部社会連携室)
〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1
TEL：03-5981-3748

jsc@atlas.jwu.ac.jp

